

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第 236 集

YAKUSHIDAIRA

薬師平遺跡 I

長野県佐久市布施薬師平遺跡 第 I 次調査

2016.3

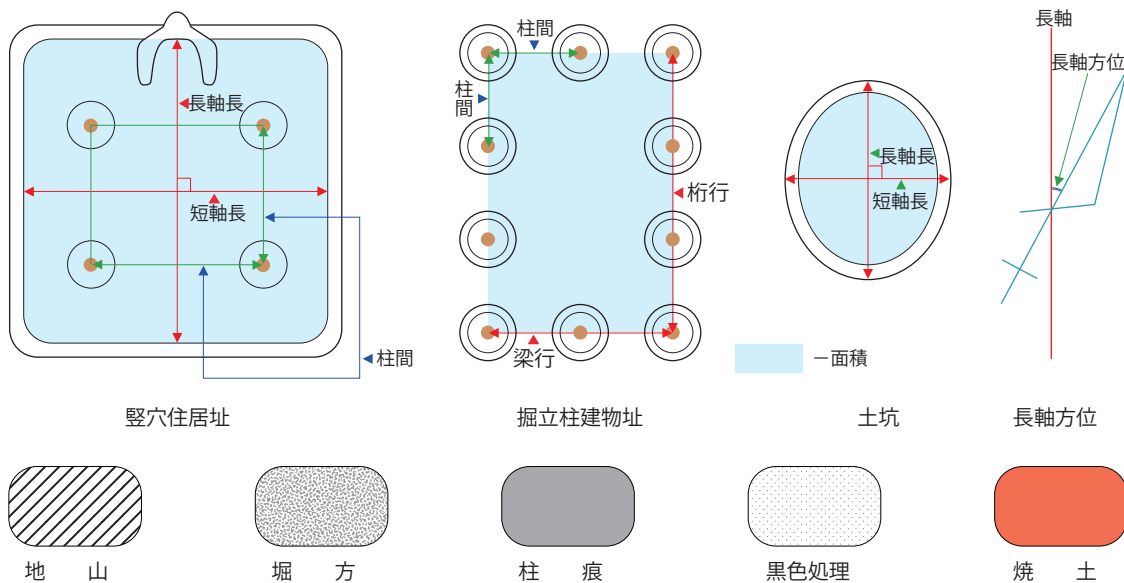
佐久市教育委員会

例 言

- 1 本書は長野県佐久市に所在する薬師平遺跡の第Ⅰ次発掘調査報告書である。
- 2 調査は社会福祉法人望月悠玄福祉会が行う（仮称）あたり前の暮らしサポートセンター建設工事に伴う記録保存を目的に佐久市教育委員会が実施した。
- 3 遺跡名及び所在地 薬師平遺跡Ⅰ（MFYⅠ）佐久市布施 776－1 他
- 4 調査期間及び面積 発掘調査：平成 27 年 4 月 6 日～5 月 7 日
整 理：平成 27 年 5 月 8 日～平成 28 年 3 月 18 日
調査面積 1,000㎡
- 5 本書に掲載した地図は佐久市発行の都市計画図（1:2,500）、佐久市教育委員会作成の遺跡詳細分布図（1:5,000）である。
- 6 本書に掲載した遺構図は、簡易遣り方測量で作成したものを(株)CUBICの「遺構くん」でデジタル化し、Adobe Illustrator で調整し作成した。
- 7 遺物実測図は手取りで行い、Adobe Illustrator でデジタルトレースを行った。
- 8 遺構・遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、Adobe Photoshop で補正等を行った。
- 9 本書の編集は Adobe InDesign で行った。
- 10 本書の作成・編集は小林が行った。
- 11 本書及び発掘調査の図面・写真などの記録及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

- 1 遺構の略記号は竪穴住居址－H、掘立柱建物址－F、土坑－D、溝址－M、ピット－Pである。
- 2 挿図の縮尺は遺構 1/80、遺物 1/4 を基本とする。これ以外ものは挿図中のスケールを参照されたい。
- 3 遺構の海拔標高は、遺構毎に統一し、水系標高をスケール上に「標高」として記してある。また、土層の色調には 1999 年版「新版 標準土色帖」に基づいた。
- 4 遺物挿図番号・遺物写真番号・遺物観察表番号は一致する。
- 5 調査区グリッドは公共座標の区割りにしたが、間隔は 4 m×4 m で設定した。
- 6 遺構の計測値は下図に示した部分の測定値である。面積は床面積、壁残高は最大値である。
- 7 挿図中における網掛は以下の表現である。



目 次

例言・凡例

目次

第Ⅰ章	発掘調査の経緯	1
第1節	調査の経緯	1
第2節	調査体制	1
第3節	遺跡周辺の環境	1
	1. 遺跡の地理的環境	1
	2. 遺跡の歴史的環境	2
	3. 基本層序	3
第4節	検出遺構・遺物の概要	3
第Ⅱ章	遺構と遺物	4
第1節	住居址	4
	H 1号住居址	4
	H 2号住居址	7
	H 3号住居址	8
	H 4号住居址	9
第2節	掘立柱建物址	9
	F 1号掘立柱建物址	9
	F 2号掘立柱建物址	9
	F 3号掘立柱建物址	9
	F 4号掘立柱建物址	9
第3節	土坑	11
	D 1号土坑	11
	D 2号土坑	11
	D 3号土坑	11
	D 4・5号土坑	11
第4節	溝址	11
	M 1号溝址	11
第5節	ピット	11
第6節	遺構外出土遺物	19
第Ⅱ章	まとめ	23
	写真図版	25
	報告書抄録	35
	奥付	35

挿 図 目 次

第 1 図	葉師平遺跡Ⅰの位置	2
第 2 図	周辺遺跡分布図	3
第 3 図	基本層序模式図	3
第 4 図	H 1号住居址 (1)	4
第 5 図	H 1号住居址 (2)	5
第 6 図	H 1号住居址 (3)	6
第 7 図	H 2号住居址 (1)	7
第 8 図	H 2号住居址 (2)	7
第 9 図	H 3号住居址	8

第10図	H4号住居址	9
第11図	F1号掘立柱建物址	10
第12図	F2号掘立柱建物址	10
第13図	F3号掘立柱建物址	10
第14図	F4号掘立柱建物址	10
第15図	土坑	12
第16図	D1・3・4号土坑、P5・66・69・70・77・78・79・81・107ピット出土遺物	13
第17図	ピット(1)	14
第18図	ピット(2)・M1号溝址	15
第19図	遺構外出土遺物(1)	16
第20図	遺構外出土遺物(2)	17
第21図	遺構外出土遺物(3)	18
第22図	薬師平遺跡全体図	24

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 調査の経緯

平成 26 年 10 月 15 日、社会福祉法人望月悠玄福祉会は望月城跡・薬師平遺跡内に福祉施設を建設するため文化財保護法第 93 条第 1 項及び文化財保護法施行令第 5 条第 2 項の規定に基づく届出を長野県教育委員会に行った。これを受け佐久市教育委員会は平成 26 年 11 月 18・19 日に試掘調査を実施し、竪穴住居址等の遺構群を検出した。保護協議を重ねた結果、遺跡の破壊が避けられないことが明らかとなった切土部分 1,000㎡について記録保存のための発掘調査を実施することとなった。平成 27 年 4 月 3 日に埋蔵文化財発掘調査契約を締結し 4 月 6 日～5 月 7 日の期間発掘調査を行った。また、同年 5 月 8 日～平成 28 年 3 月 18 日の期間整理作業を行い、本書を刊行した。

第 2 節 調査体制

平成 27 年度

調査主体者	佐久市教育委員会	教 育 長	棚澤晴樹
事 務 局	社会教育部	部長	山浦俊彦
	文化振興課	課長	小林 聖
		企画幹	三石 建
	文化財調査係	係長	大塚広樹
		係	小林真寿 富沢一明 上原 学
			神津一明 生島修平
		調査担当者	小林真寿
		調 査 員	赤羽根篤、浅沼勝男、甘利隆雄、飯森成英 岩松茂年、小島 真、小林敏雄、木内修一 中沢 登、羽毛田利明、山田叔正、油井満芳 横尾敏雄、依田好行

第 3 節 遺跡周辺の環境

1 遺跡の地理的環境

望月地区（旧望月町）は北佐久郡の中でも千曲川の西方に位置し、北は東御市（旧北御牧村）、西は立科町、東は浅科地区、南は一部が旧佐久市と隣接している。西南方向には、蓼科山（2,530 m）を中心とする山系が連なり、北東方向には千曲川を隔てて浅間山（2,560 m）の連山を臨むことができる。望月地区の地質及び地形の形成は、大きく二つの要因に起因している。一つは、蓼科山の火山活動により基盤並びに地形が形成されていることであり、もう一つは御牧原台地や八重原台地が地殻の断層運動によって形成されていることである。望月地区にかかる御牧原台地は、その南端において上部は「相浜層」と呼ばれる非常にもろい湖沼性堆積層で形成されており、各所に露頭箇所をみることができる。堆積物は、凝灰岩、泥岩、砂岩および礫質砂岩などで、幾層にも繰り返して互層しており、ほぼ水平層に近い。これらの地層の中で泥岩からは、針葉樹や広葉樹などの珪藻類の化石が産出し、比較的容易に採取することができる。また、相浜層の下部には「瓜生坂層」と呼ばれる堆積層があり、メタセコイヤなどの植物化石が得られるところから、新生代第三紀鮮新世の後期に属し、今から約 200 万年前に形成されたことが知られる。なお、相浜層は新生代第四紀更新世に属し、200 万年前の形成層である。一見すればこれらの台地は、蓼科山の裾野が連なっているように見えるが、瓜生坂地籍から御牧原台地にかけては、その形成過程にかなりの相違がみられるのである。

一方、蓼科火山によって形成された地域は、立科町芦田付近、望月地区の瓜生坂より北方の茂田井地籍を除く全地域、さらに浅科地区の五郎兵衛新田付近にまで達している。これらの地域をいわゆる蓼科火山地域と呼んでおり、当遺跡もこの地域の中に存在する。中央に位置する蓼科火山群の南方には、八ヶ岳火山群が連なり、また西方には霧ヶ峰火山群が存在する。蓼科山は、全般に緩斜面の裾野が北方の望月方向へ長く延びている。大河原峠付近にあっては急傾

斜の谷を形成しているが、多くは蓼科山を中心に放射状に延びる緩やかな谷を形成している。これらの地域には安山岩の分布が広くみられ、中でも両輝石安山岩、しそ輝石安山岩、角閃石安山岩が主体を形成している。これらは、八丁地川中流域に見ることができ、しかも熱の珪化作用による板状節理が見事に発達した露頭箇所を見ることができる。望月地区を流れる主流は鹿曲川、細小路川、八丁地川、布施川の4河川であり、いずれも蓼科山を源流とし、長い裾野を抜いて流下し、千曲川に合流している。

蓼科山と主流4河川は望月地区の人々の生活や、動植物の生息に対し必須の自然条件であり、これらの作り出した自然環境がこの地の歴史を育んできたのである。

(1984年 望月町教育委員会 望月町文化財調査報告書 第14集「胡桃沢・瓜生坂A・宮久保A・布施山寺A・岩井遺跡」第II章に加筆)

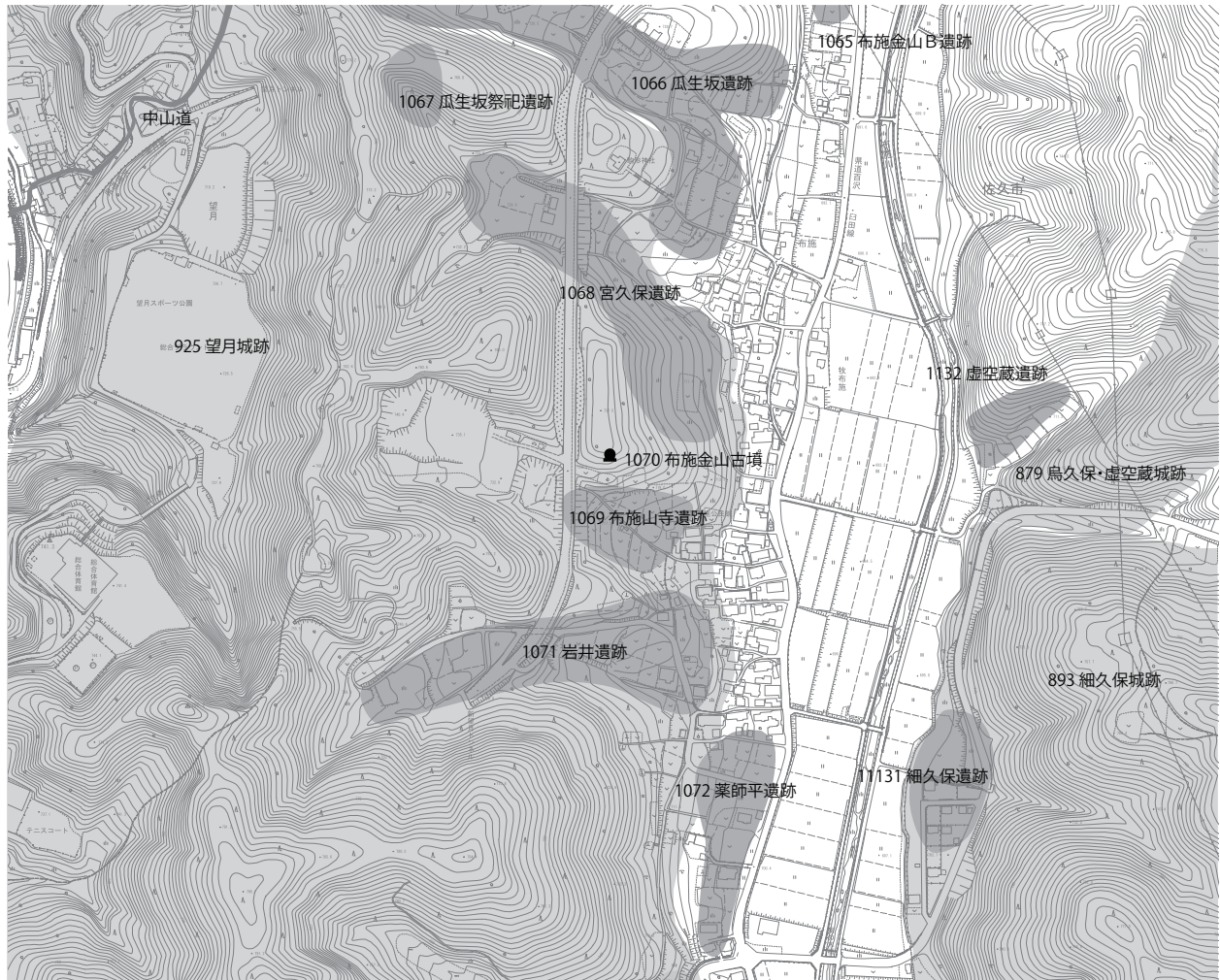
2 遺跡の歴史的環境

薬師平遺跡は布施川の西方に続く蓼科山からの裾野の東向き斜面から、布施川の形成した幅狭な沖積谷の平坦面にかけて展開しており、背後には望月城の郭群が控えている。北方には瓜生坂祭祀遺跡が存在し、当遺跡が古道(所謂古東山道)の近くに営まれた集落であることが注目される。布施川の下流方向に向かい、当遺跡と瓜生坂祭祀遺跡の間には蓼科山の裾野から東の布施川に向かい形成された小規模な扇状地が三つ存在し、南から岩井遺跡、布施山寺遺跡、宮久保遺跡が存在する。国道142号線バイパス建設工事に伴い昭和57年にこの3遺跡は調査が実施され、岩井遺跡からは奈良時代の竪穴住居址2棟、布施山寺遺跡からは縄文時代前期・奈良時代の土器が発見された。宮久保遺跡からも奈良時代の竪穴住居址2棟が検出されており、奈良時代に入りこの地域の開発が進んだ状況が垣間見られる。望月城跡を挟んだ現望月集落側に比較的多数の古墳が存在し、古墳群が形成されているのに対し、布施側に立地する古墳は非常に少なく、布施山寺遺跡北隣の尾根端部に構築された布施山寺古墳は貴重な古墳である。古墳が極めて少ないという状況もこの地域の開発が奈良時代に入り本格化した事を裏付けるものであり、奈良時代の開発要員



第1図 薬師平遺跡Ⅰの位置

の一つとして須恵器生産も考慮する必要があるだろう。名馬の産地として有名な望月牧は御牧原台地に造られたものであるが、布施地域にも牧布施などの地名もあり、牧も存在したのではないだろうか。中世に入ると布施川の兩岸の山地には数多くの山城が造られるようになる。非常に不安定な政治状況を反映したものであろう。



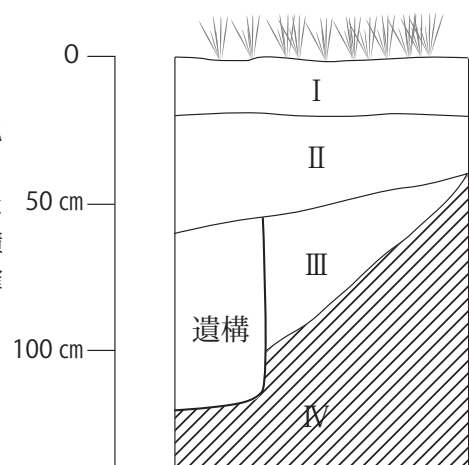
第2図 周辺遺跡分布図

3 基本層序

基本層序は第3図のとおりである。Ⅰ層は耕作土で約20cmの堆積。Ⅱ層は灰黄褐色土層（10YR5/2）で20～40cmの堆積。Ⅲ層は黒褐色土層（10YR3/2）で0～60cmの堆積。Ⅳ層はにぶい黄橙色（10YR7/4）の粘土層で地山である。遺構はⅢ層上面から切り込んでいるが、遺跡は西から東に向かう斜面地形上に立地しており、粘質土が溶けながら堆積を繰り返し堆積土層を形成したため、Ⅳ層上面まで掘り下げないと明確には遺構を把握できない状況であった。

第4節 検出遺構・遺物の概要

検出された遺構・遺物の概要は以下のとおりである。



第3図 基本層序模式図

- 遺構 竪穴住居址－4棟、掘立柱建物址－4棟、土坑－5基、溝址－1条、ピット－80基
- 遺物 土師器、須恵器、灰釉陶器、鉄器、石器・石製品

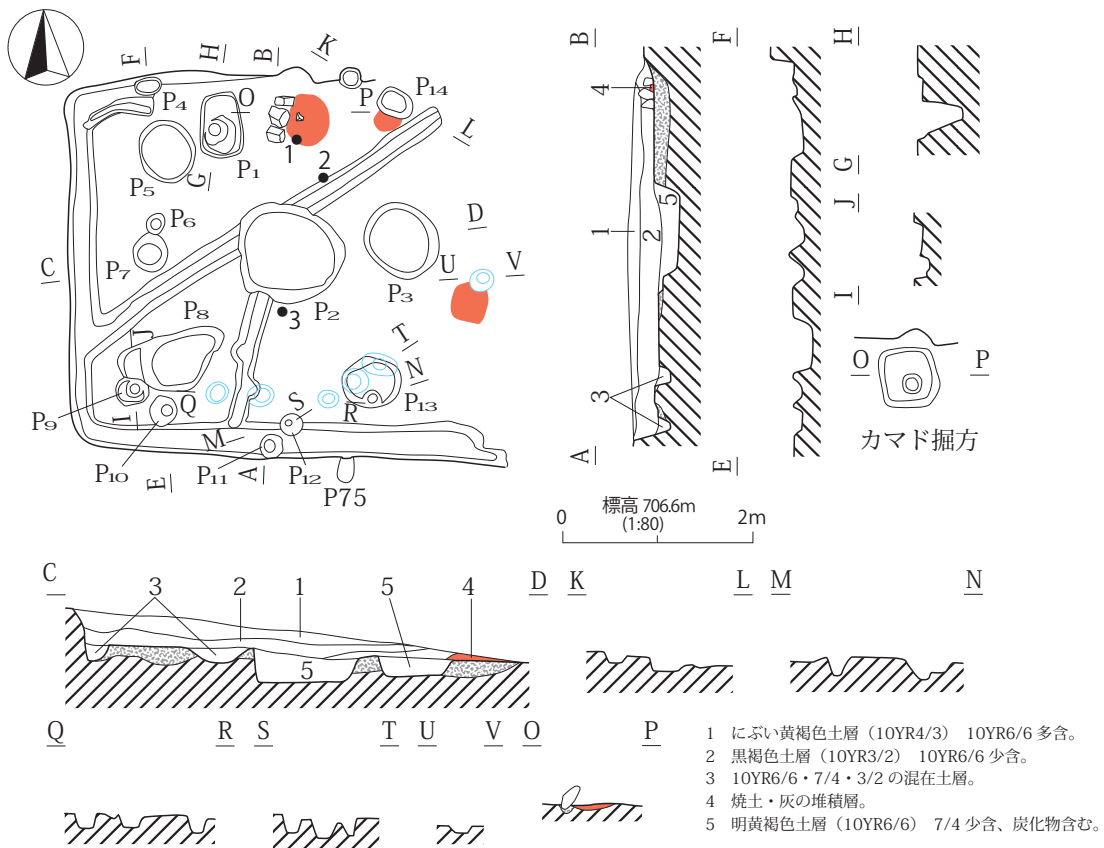
第Ⅱ章 遺構と遺物

第1節 住居址

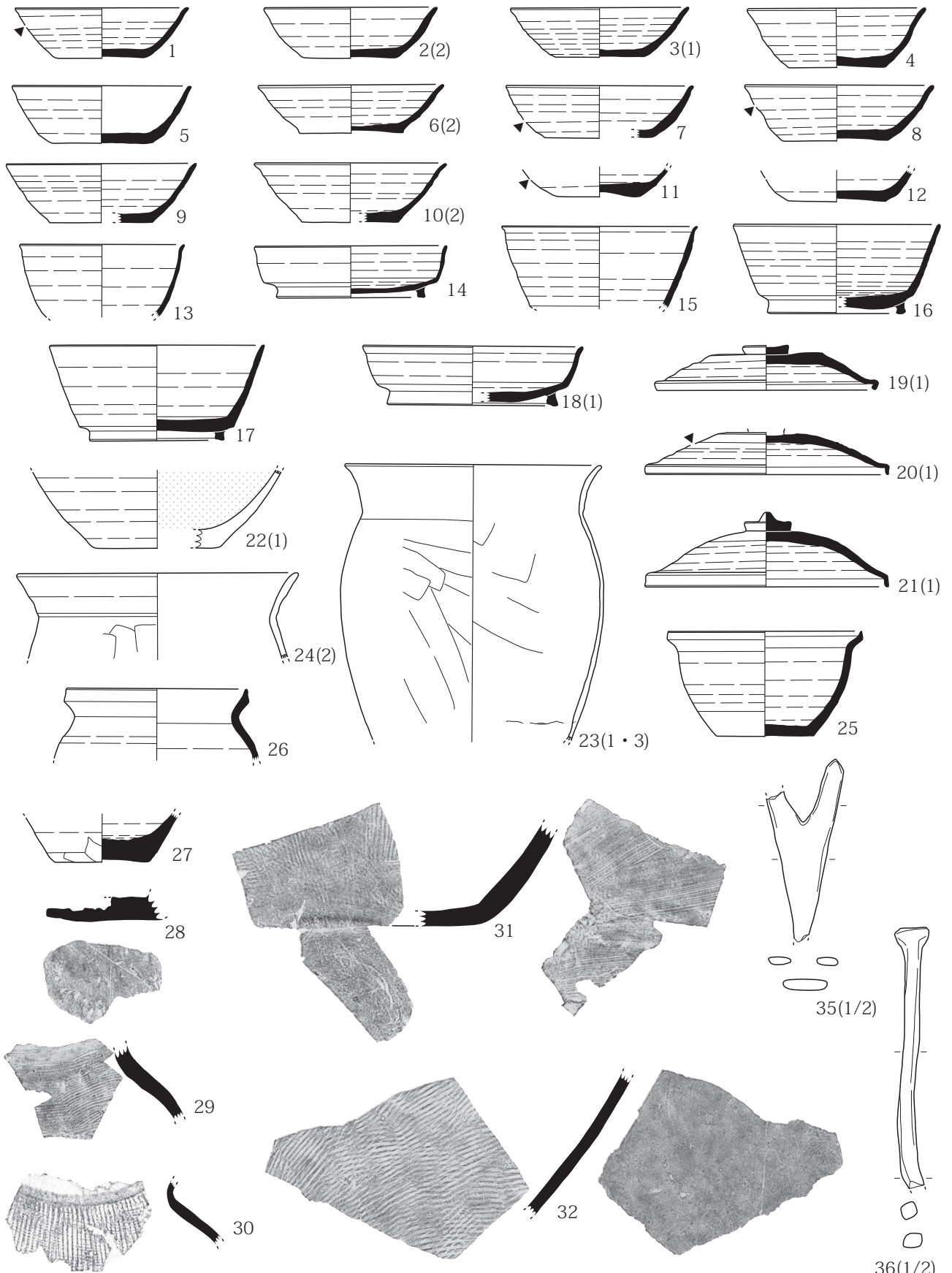
●H1号住居址（第4・5・6図）

I B 7グリットで検出された。北東隅から南東隅にかけては残存しない。P 74等との重複関係は不明である。N－3°－Eに長軸方位をとり、長軸長3.76 m、壁残高0.4 mの規模を呈する。平面形状は方形である。ピットは床面で16基、掘方で6基が検出されたが支柱は判然としない。周溝は壁下を巡る。周溝から斜位に住居床面に掘り込まれた溝の性格は不明である。カマドは北壁中央に石で構築されていたが、半壊状態であった。カマド部分の他に、2か所で床面上に焼土が検出されたが性格は不明である。

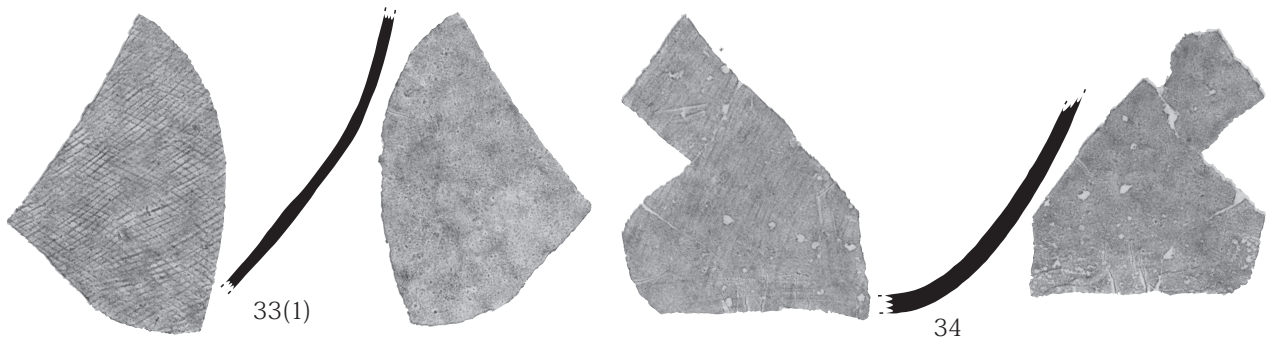
遺物は土師器、須恵器、鉄器が出土している。土師器には鉢（22）、甕（23・24）の器種が認められる。鉢は内面黒色処理が施される。甕は2点共に「く」字状口縁の武蔵甕である。須恵器には、坏（1～12）、有台坏（13～18）、坏蓋（19～21）、鉢（25）、甕（26～34）の器種が認められる。坏のロクロからの切り離しは回転糸切で行われており、内外面に火襌痕が認められる。有台坏は身が深いものと（13・15～17）と身の浅い（14・18）が存在する。坏蓋のつまみは扁平で内外面に火襌が顕著である。鉢は同器形の甕を小型にしたものである。外底中央に回転糸切痕を僅かに残し、周縁部にかけて回転ヘラ削り調整を施している。甕は叩き技法で作られており、28の外底にはヘラ記号「×」が、29の外表面や31の内面には刷毛目調整が施されている。



第4図 H1号住居址（1）



第5图 H1号住居址(2)



第6図 H1号住居址(3)

鉄器は雁又鍬の鍬身部と鍬の茎部が出土している。接合部は認められないが同一個体と思われる。

以上の出土遺物の特徴から、本址は聖原編年の奈良平安時代Ⅳ期－8C第Ⅳ四半期～9C初頭の所産と考えられる。

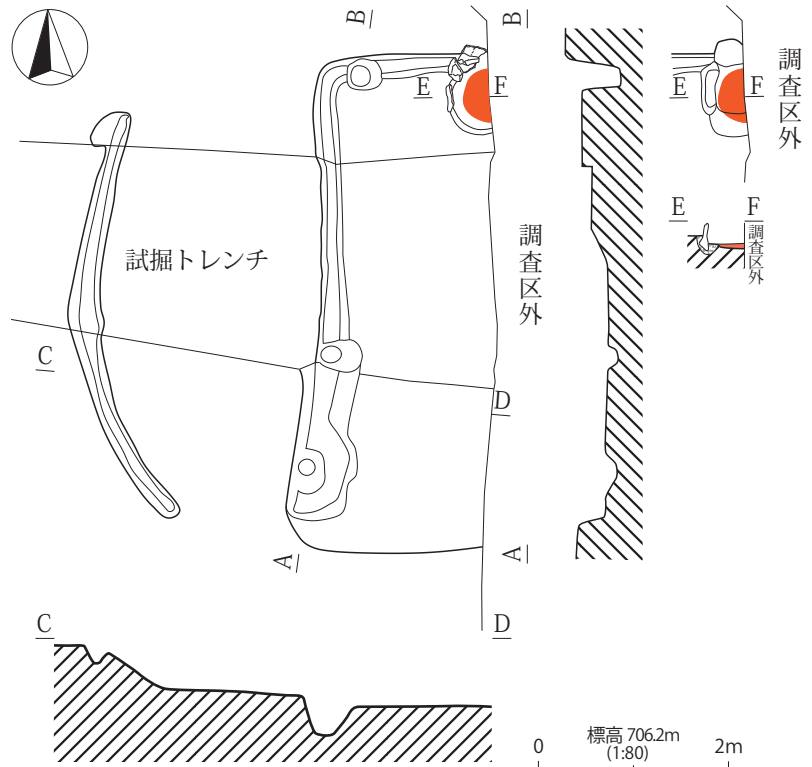
第1表 H1号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法量			成形・調整		備考	出土層位
			口径	底径	器高	内面	外面		
1	須恵器	坏	(12.6)	6.6	3.6	火襴	火襴	完全実測	I区
2	須恵器	坏	12.6)	(6.8)	3.7	ロクロナデ	回転糸切	回転実測	No2
3	須恵器	坏	(13.0)	(6.6)	3.6	火襴	火襴	回転実測	No1、I・II区
4	須恵器	坏	(13.0)	(7.2)	4.3	ロクロナデ	回転糸切	回転実測	IV区
5	須恵器	坏	(13.0)	(7.6)	4.2	ロクロナデ	右回転糸切	回転実測	I・II・III区、P5
6	須恵器	坏	(13.4)	(7.6)	3.5	火襴	火襴・回転糸切	回転実測	No2
7	須恵器	坏	(13.6)	(7.8)	(3.8)	火襴	回転糸切	回転実測	II区・P1
8	須恵器	坏	(13.7)	7.6	4.0	ロクロナデ	回転糸切	完全実測	II区・P1
9	須恵器	坏	(13.8)	(7.4)	(4.3)	火襴	火襴	回転実測	I区
10	須恵器	坏	(14.0)	(7.0)	4.3	火襴	回転糸切	回転実測	No2
11	須恵器	坏	—	6.2	<2.2>	ロクロナデ	火襴・回転糸切	完全実測	II区・P1
12	須恵器	坏	—	7.0	<2.3>	ロクロナデ	右回転糸切	完全実測	I区・IV区
13	須恵器	有台坏	(12.0)	—	<5.3>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	III区・IV区
14	須恵器	有台坏	(15.6)	(9.8)	6.9	火襴	回転ヘラケズリ→付高台	回転実測	P2
15	須恵器	有台坏	(14.2)	—	<6.0>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	IV区ホリ
16	須恵器	有台坏	(15.0)	(10.0)	(6.5)	ロクロナデ	回転糸切→周縁ヘラケズリ→付高台	回転実測	III区
17	須恵器	有台坏	(15.6)	(9.8)	6.9	火襴	火襴・回転糸切→回転ヘラケズリ→付高台	回転実測	II区・P1
18	須恵器	有台坏	(16.0)	(12.4)	(4.3)	ロクロナデ	回転ヘラケズリ→付高台	回転実測	P2
19	須恵器	坏蓋	15.4	—	3.3	火襴	火襴	完全実測	No1
20	須恵器	坏蓋	(17.0)	—	<3.0>	火襴	火襴・回転ヘラケズリ・つまみ欠損	完全実測	No1
21	須恵器	坏蓋	17.0	—	4.5	火襴	火襴・回転ヘラケズリ	完全実測	No1
22	土師器	鉢	—	(9.2)	<5.1>	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測	No1
23	土師器	武蔵甕	(18.6)	—	<17.4>	ナデ	ヘラケズリ	回転実測	No1・3、I区
24	土師器	武蔵甕	(20.4)	—	<5.2>	ナデ	ヘラケズリ	回転実測	No2、P2・8
25	須恵器	鉢	(14.0)	(7.0)	6.3	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	回転実測	II区
26	須恵器	甕	(13.2)	—	<4.3>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	II区
27	須恵器	甕	—	(6.4)	<2.9>	ロクロナデ	回転糸切・周縁ヘラケズリ	回転実測	III区
28	須恵器	甕	—	—	<1.4>	—	ヘラ記号「×」	破片実測	IV区
29	須恵器	甕	—	—	—	ナデ	ハケ目	破片実測	II区
30	須恵器	甕	—	—	—	ロクロナデ	平行叩目	破片実測	I区・P2
31	須恵器	甕	—	—	—	ハケ目	平行叩目	破片実測	III区
32	須恵器	甕	—	—	—	当具痕→ナデ	平行叩目	破片実測	I区
33	須恵器	甕	—	—	—	当具痕→ナデ	格子叩目	破片実測	No1
34	須恵器	甕	—	—	—	当具痕→ナデ	平行叩目	破片実測	II区・P5
35	鉄器	雁又鍬	<6.6>	<2.8>	0.4	11.7 g、先端・片脚欠損	—	完全実測	II区
36	鉄器	鍬	<9.4>	0.5	0.5	15.5 g、先端欠損	—	完全実測	II区

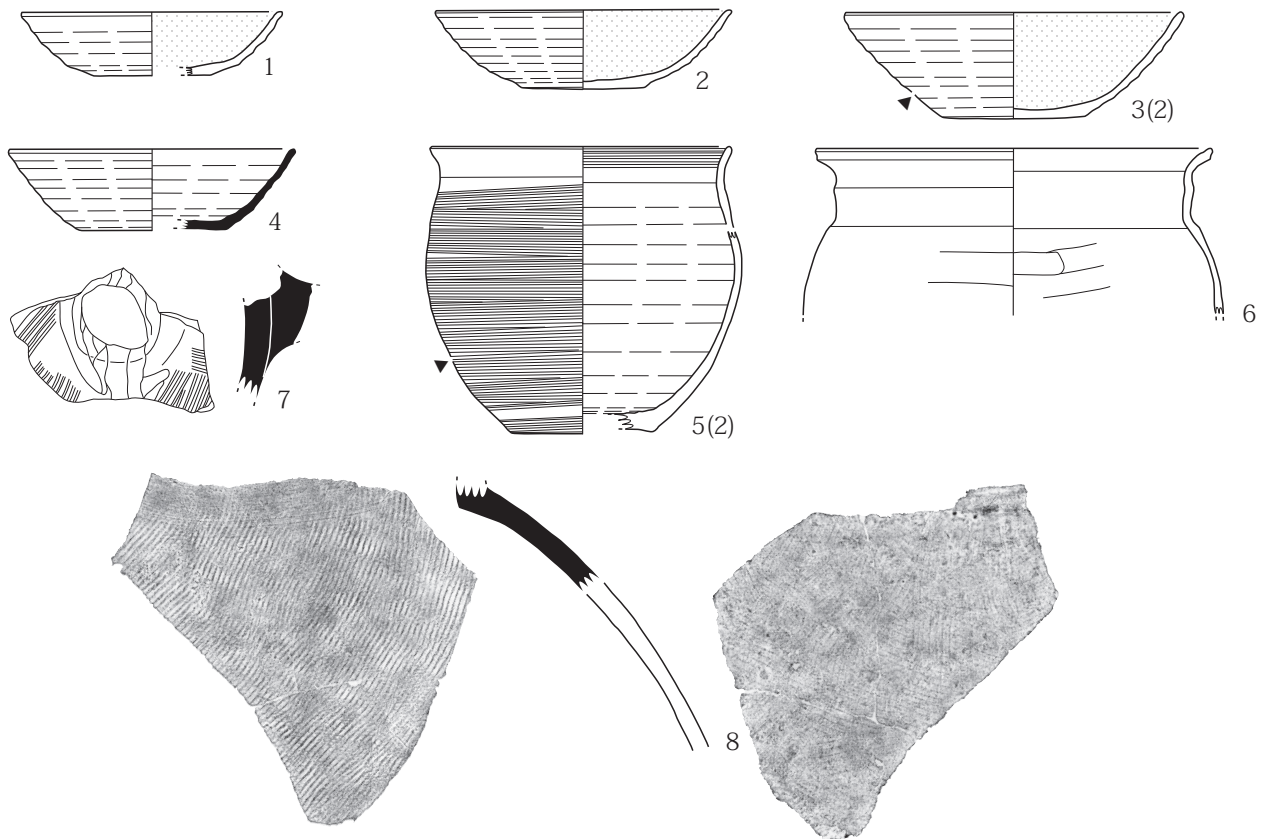
●H 2号住居址 (第7・8図)

ⅡD6グリットで検出された。東半部分が調査区外に延びるため、全容は不明である。F3・4号掘立柱建物址を切る。N-3°-Eに長軸方位をとる。長軸長5.04m、壁残高0.48mの規模である。壁下を巡る周溝内に穿たれたピットが3基検出されたが、その配置に規則性は認められない。西壁の外約2mに弧状に掘られた溝は本址に帰属する可能性が強いものと思われる。カマドは北壁の中央部分に石で構築されているが、東半部分は調査区外に延びるため未調査である。

出土遺物は土師器、須恵器が認められる。土師器には坏(1~3)、甕(5・6)の器種がある。坏は内面ヘラミガキで黒色処理が施される。ロクロからの切り離しは回転糸切であるが、ヘラケズリ調整により糸切痕を消去している。甕はカキ目調整が顕著な中型のロクロ甕と「コ」字口縁の武蔵甕が存在する。須恵器には、坏(4)、甕(7・8)



第7図 H2号住居址(1)



第8図 H2号住居址(2)

の器種がある。坏は内外面に火襷痕が認められ、ロクロからは回転糸切により切り離されている。甕7は把手が付くが、欠損している。8は内面の当具痕をナデ調整により消去した後、叩き板で再度軽く叩いて調整を行っている。

以上の出土遺物の特徴から、本址は聖原編年の奈良平安時代V期—9世紀前半の所産と考えられる。

第2表 H2号住居址出土遺物観察表

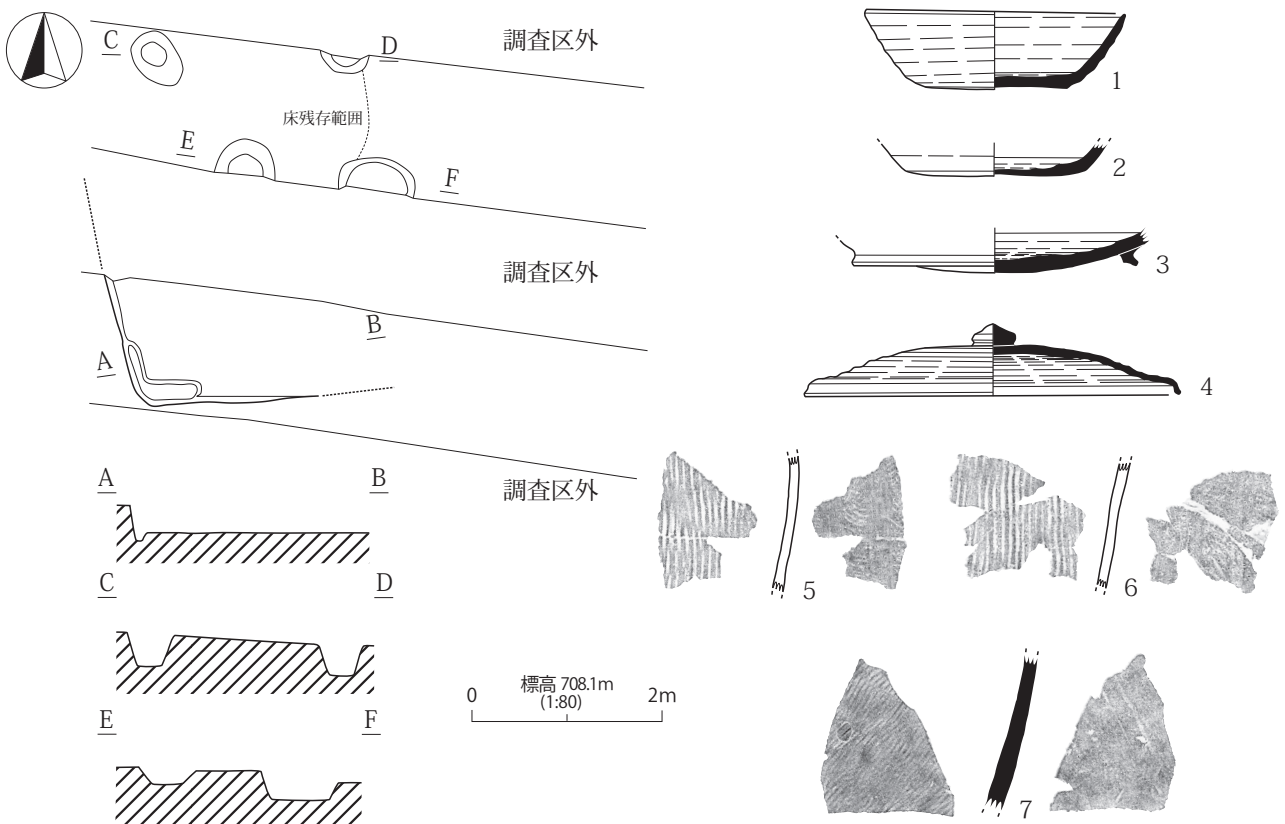
No	器種	器形	法 量			成 形・調 整		備 考	出土層位
			口 径	底 径	器 高	内 面	外 面		
1	土師器	坏	(13.8)	(6.0)	3.3	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	回転実測	覆土
2	土師器	坏	(15.6)	(6.5)	4.3	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	回転実測	II D5
3	土師器	坏	(18.0)	(7.4)	5.6	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切→ヘラケズリ	完全実測	No2
4	須恵器	坏	(15.2)	(7.6)	4.3	火襷	回転糸切・火襷	回転実測	カマド
5	土師器	ロクロ甕	(15.9)	(7.4)	15.2	ロクロナデ→カキ目	回転糸切→カキ目	完全実測	No2
6	土師器	武蔵甕	(21.0)	—	<8.7>	ナデ	ヘラケズリ	回転実測	カマド
7	須恵器	甕	—	—	—	当具痕	平行叩目・把手欠損	破片実測	覆土
8	須恵器	甕	—	—	—	当具痕→ナデ→平行叩目	平行叩目	破片実測・拓本	カマド・II E5

●H3号住居址 (第9図)

II D3グリットで検出された。畑を造成した際に削平されており、南西隅の壁と床面が僅かに残存していた。その為、規模・形状については不明である。

出土遺物は須恵器と土師器が認められる。土師器は叩き成形されたロクロ甕片が2点(5・6)出土している。接合箇所は認められないが、同一個体である。須恵器は坏(1・2)、有台坏(3)、坏蓋(4)、甕(7)の器種が出土している。坏・有台坏のロクロからの切り離しは回転ヘラ切である。有台坏は底部中央が高台から突出する形状である。坏蓋は口径が大きなもので、回転ヘラ削り調整が施された天井部に扁平なつまみが貼付されている。甕は叩成形で外面には平行叩目痕が残される。

以上の出土遺物の特徴から、本址は聖原編年の奈良平安時代II期—8世紀第2四半期の所産と考えられる。



第9図 H3号住居址

第3表 H3号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法量			成形・調整		備考	出土層位
			口径	底径	器高	内面	外面		
1	須恵器	坏	13.8	7.5	4.3	火襷	ヘラケズリ・火襷	完全実測	覆土
2	須恵器	坏	—	(9.6)	<1.8>	ロクロナデ	回転ヘラ切り	回転実測	覆土
3	須恵器	有台付	—	(15.0)	<2.4>	ロクロナデ	回転ヘラ切り→付高台	回転実測	覆土
4	須恵器	坏蓋	20.0	—	3.9	ロクロナデ	回転ヘラケズリ→つまみ貼付	完全実測	覆土
5	土師器	ロクロ甕	—	—	—	当具痕→ナデ	平行叩目	破片実測・拓本	II D2・II E2
6	土師器	ロクロ甕	—	—	—	当具痕→ナデ	平行叩目	破片実測・拓本	II E2
7	須恵器	甕	—	—	—	当具痕→ナデ	平行叩目	破片実測・拓本	覆土

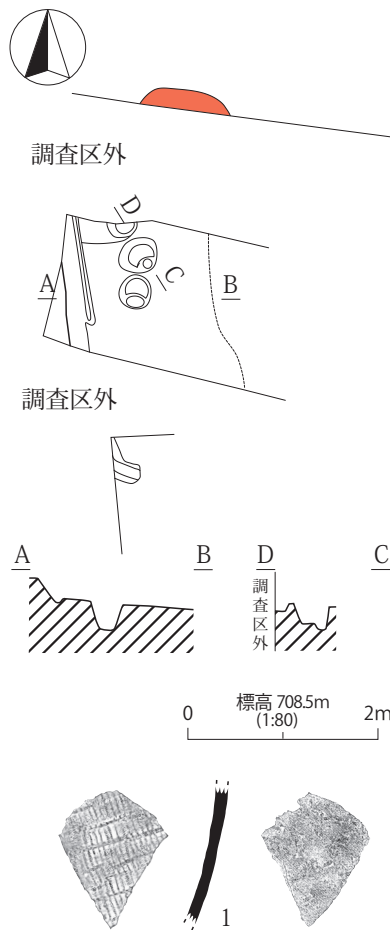
●H4号住居址(第10図)

II D 2グリットで検出された。H3号住居址同様に畑を造成した際に削平されており、西壁の一部と床面、カマドと思われる焼土が僅かに残存していた。その為、規模・形状については不明である。

出土遺物は須恵器の甕片が1点出土したのみであり、本址の年代は不明と言わざるを得ない。

第4表 H4号住居址出土遺物観察表

No	器種	器形	法量			成形・調整		備考	出土層位
			口径	底径	器高	内面	外面		
1	須恵器	甕	—	—	—	当具痕→ナデ	平行叩目	破片実測・拓本	覆土



第10図 H4号住居址

第2節 掘立柱建物址

●F1号掘立柱建物址(第11図)

I B 6グリットで検出された。西方向の調査区外に展開するようであり、梁間と思われる1辺3基のピットが検出された。梁間長4.4m、梁間柱間2.32～2.08m、掘方径0.64～0.88、掘方深度0.32～0.53の規模である。

出土遺物は皆無であり、時期は不明である。

●F2号掘立柱建物址(第12図)

I E 5グリットで検出された。斜面下方に当たる東方向は、畑造成時の影響であろうか消滅していた。N-10°-Eに長軸方位をとる。桁行長5.12m、桁行柱間0.88～2.8m、掘方径0.2～0.64m、掘方深度0.136～0.32mの規模である。

出土遺物は皆無であり、時期は不明である。

●F3号掘立柱建物址(第13図)

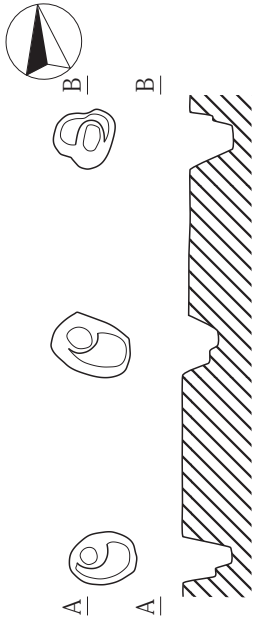
II D 5グリットで検出された。H2号住居址に切られ、F4号掘立柱建物址を切るが、F4は本址の建て替えの可能性が高い。梁間長4.08m、梁間柱間2.0～2.08m、桁行柱間1.44m、掘方径0.76～1.04m、掘方深度0.48～0.88mの規模である。

出土遺物は皆無であり、時期は不明である。

●F4号掘立柱建物址(第14図)

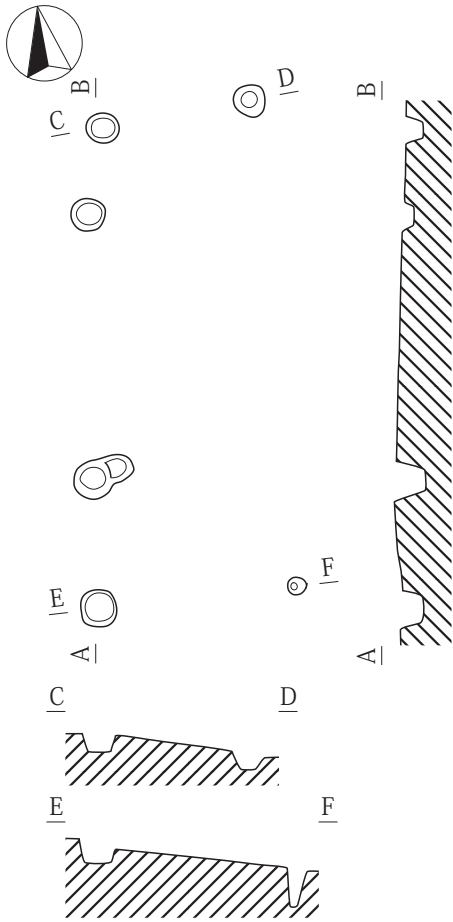
II D 5グリットで検出された。H2号住居址、F3号掘立柱建物址に切られるが、F3との関係は建て替えの可能性が高い。梁間長3.84m、梁間柱間1.84～2.0m、桁行柱間1.36～1.76m、掘方径0.4～2.48m、掘方深度0.24～0.64mの規模である。

出土遺物は皆無であり、時期は不明である。



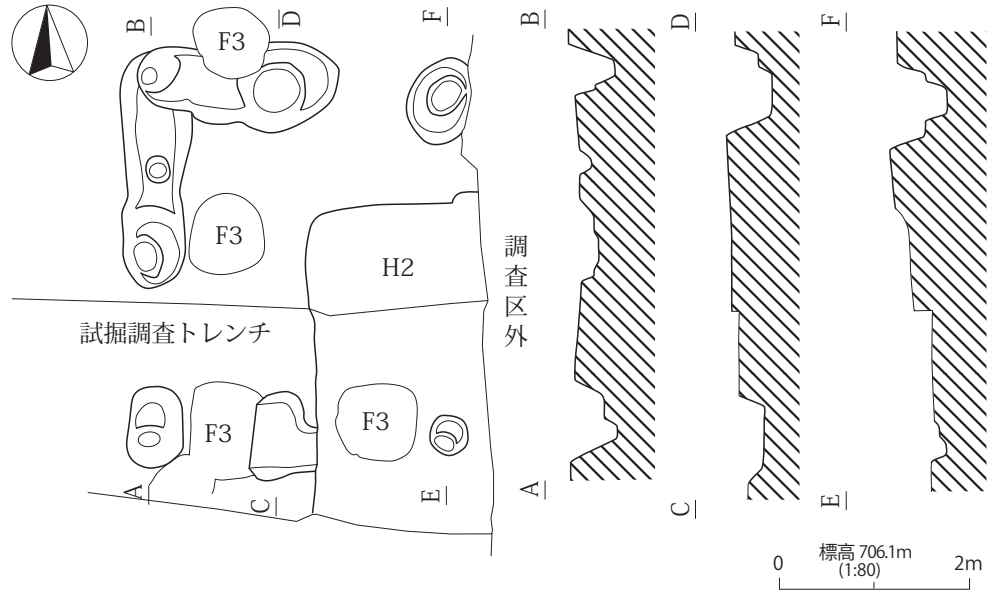
0 標高 707.0m (1:80) 2m

第11図 F1号掘立柱建物

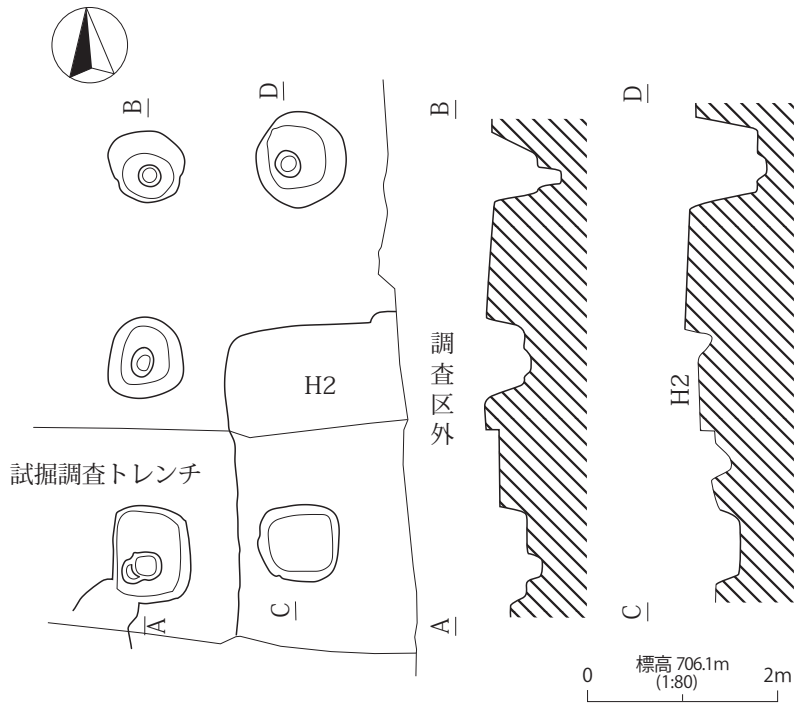


0 標高 707.2m (1:80) 2m

第12図 F2号掘立柱建物址



第14図 F4号掘立柱建物址



第13図 F3号掘立柱建物址

第3節 土坑

●D1号土坑（第15・16図）

I D 7グリットで検出された。P56・57に切られる。N-103°-Eに長軸方位をとる。短径2.8 m、壁残高1.36 mの規模で、平面形状は不整形であるが、東方向に調査区外に延びるため詳細は不明である。覆土中には多量の礫が含まれていたが、自然堆積なのか人為的なものは判断できなかった。東端部底面から検出された方形の掘り込みは、D5と同様な形態であるが曲物は確認されなかった。

遺物は土師器、須恵器が出土している。土師器には碗（1）、甕（6・7）の器種がある。碗は内面黒色処理のもので、甕は2点共にロクロ甕である。7は叩き成形時の叩目が残されている。須恵器には坏（2・4）、有台坏（3）、坏蓋（5）の器種が認められる。坏4は古墳時代7世紀の所産であり混入品であろう。2の坏は回転糸切でロクロから切り離され、3の有台坏は回転ヘラ切によりロクロから切り離される。坏蓋5のつまみは扁平で、天井部には回転ヘラケズリ調整が施されている。

以上の出土遺物の特徴から、本址は聖原編年の奈良平安時代V期-9世紀前半の所産と考えられる。

●D2号土坑（第15図）

I B 8グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-81°-Eに長軸方位をとる。壁残高0.4 mの規模で、楕円形の平面形状と思われるが、東方向に調査区外に延びるため詳細は不明である。

出土遺物は皆無であり、時期は不明である。

●D3号土坑（第15・16図）

I D 3グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。N-47°-Eに長軸方位をとる。長径1.6 m、短径0.72 m、壁残高0.32 m、面積0.59㎡の規模で、不整な楕円形の平面である。

出土遺物は砥石が1点出土したのみであり、時期は不明である。

●D4号土坑（第15・16図）

II A 4グリットで検出された。D5とは同一遺構の可能性が高い。N-40°-Wに長軸方位をとる。壁残高0.56 mの規模で、楕円形の平面形状と思われるが、斜面に構築されており、東半部は消失している。周溝状の溝やピットも本址及びD5に伴うものと思われ、住居址である可能性も皆無ではない。

出土遺物で図示出来るのは須恵器甕のみである。時期的には聖原編年の奈良平安時代V・VI期-9世紀代のものと考えられるが、図示不可能な常滑焼甕片が出土していることから、本址は中世の所産と思われる。

●D5号土坑（第15図）

II A 4グリットで検出された。D4とは同一遺構の可能性が高い。N-50°-Eに長軸方位をとる。長径0.8 m、短径0.72 m、壁残高0.48 m、面積0.3の規模で、方形の平面形状である。内部には石で固定された底がない曲物が設置され、粒子の細かい泥が堆積していた。

曲物以外の出土遺物は皆無であるが、D4と同一遺構と思われることから、中世の所産と思われる。

第4節 溝址

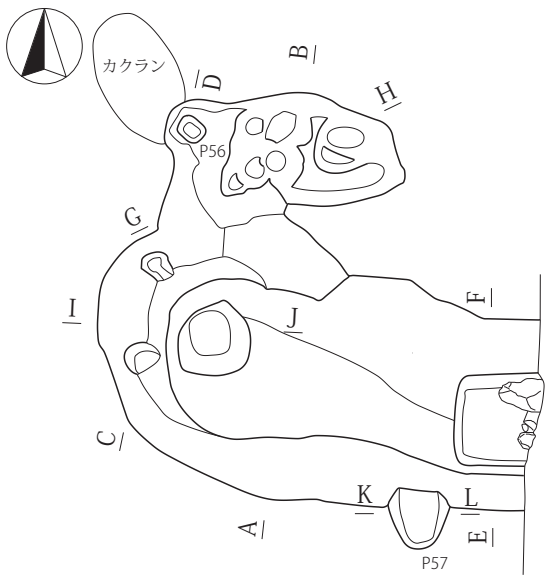
●M1号溝址（第18図）

III D 4グリットで検出された。他遺構との重複関係は有さない。北方向の調査区外に延びるため全容は不明である。調査部分の全長は約4.0 mで、断面は逆梯形である。深度は最大0.12 mであった。

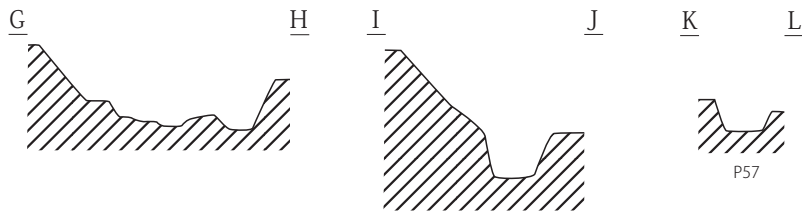
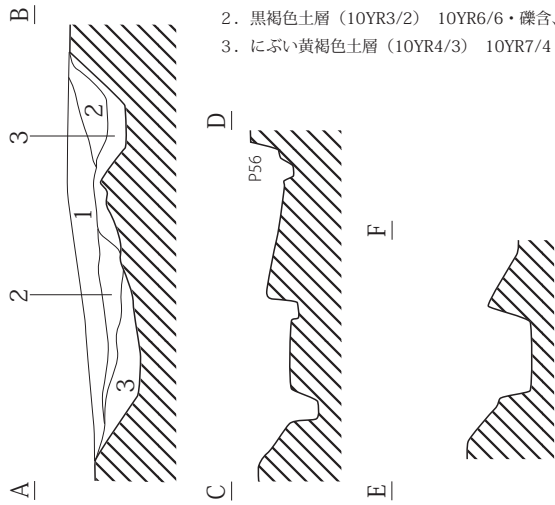
出土遺物は皆無であり、時期・性格は不明である。

第5節 ピット（第17・18図）

総数87基のピットが検出された。II区に集中する傾向が認められるが、I区の南半部分が遺構の空白部となっているのは、暗渠等によるカクランの影響及び、斜面上方からの差し水の水道であることから雨水による斜面の崩壊を懸念し、表土の掘削深度を控えた事も影響をしている。規模的は87基の平均値が長径0.42 m、短径0.33 m、深度0.23

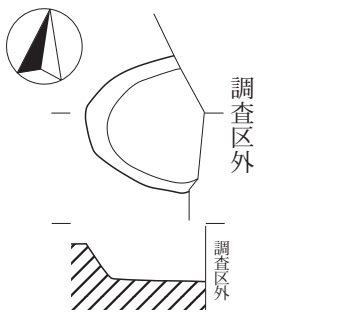


1. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 礫含、10YR6/6 少含。
2. 黒褐色土層 (10YR3/2) 10YR6/6・礫含、焼土粒子少含。
3. にぶい黄褐色土層 (10YR4/3) 10YR7/4 多含。



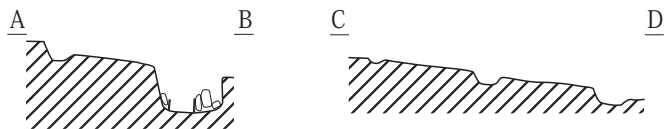
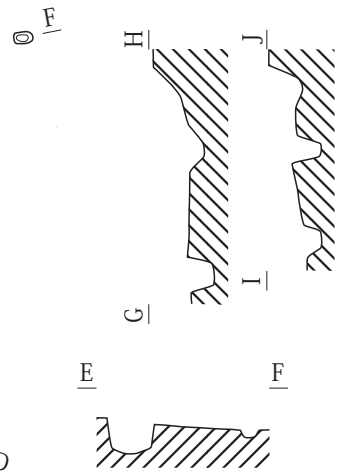
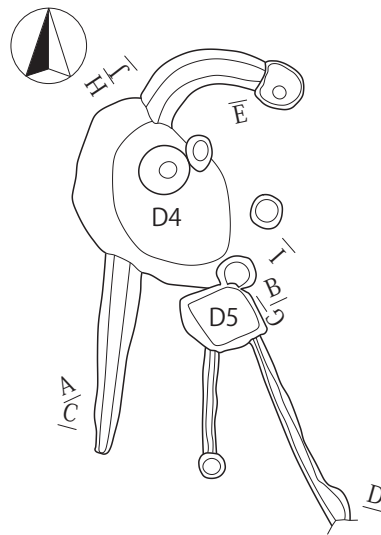
0 標高 706.2m (1:80) 2m

D 1号土坑



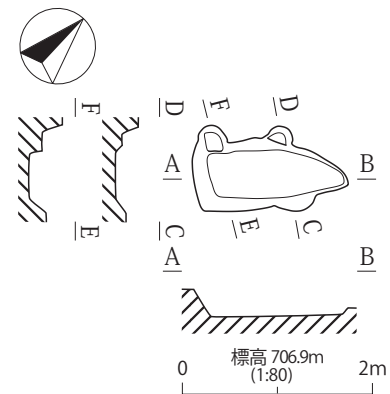
0 標高 705.9m (1:80) 2m

D 2号土坑



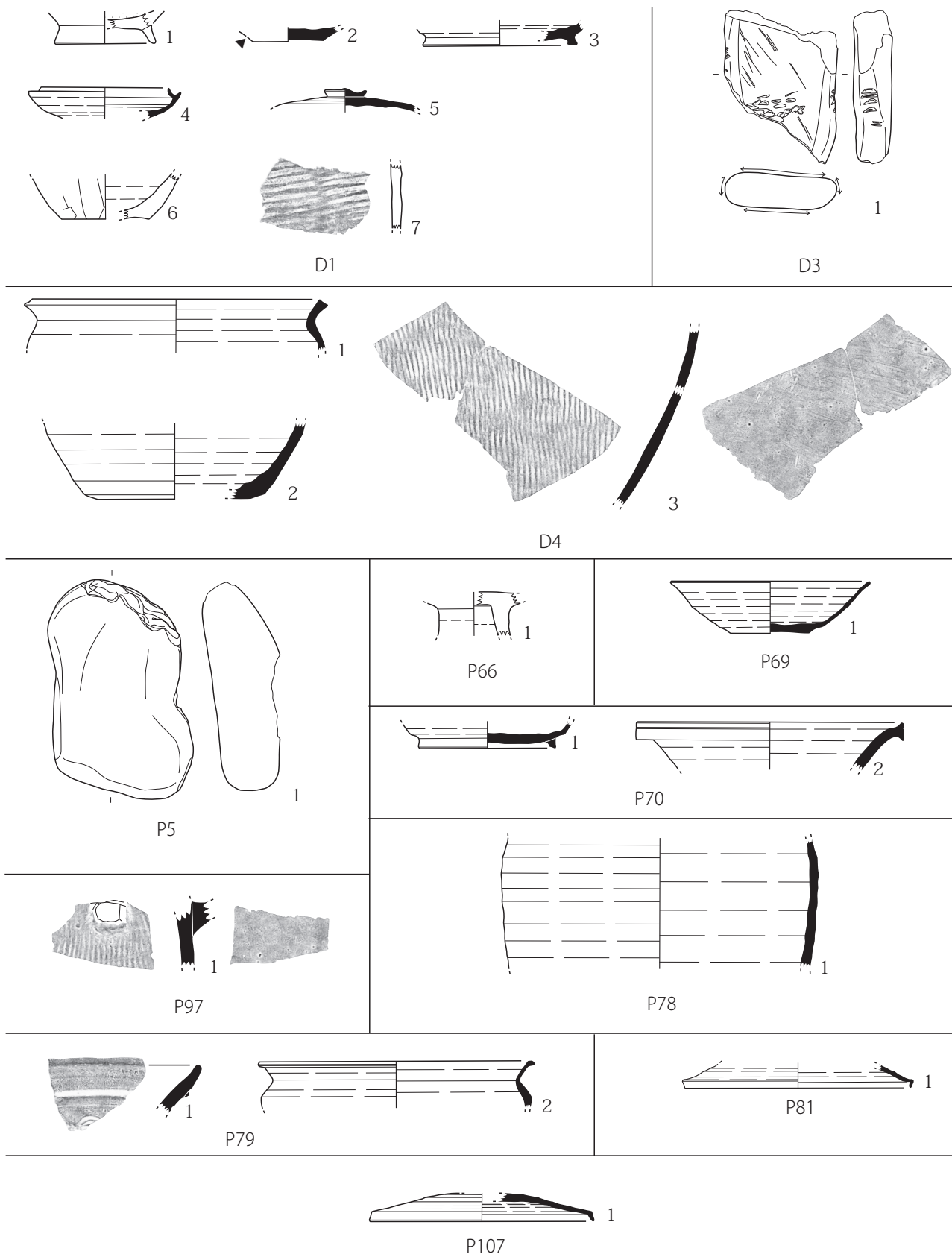
0 標高 707.3m (1:80) 2m

D 4・D 5号土坑

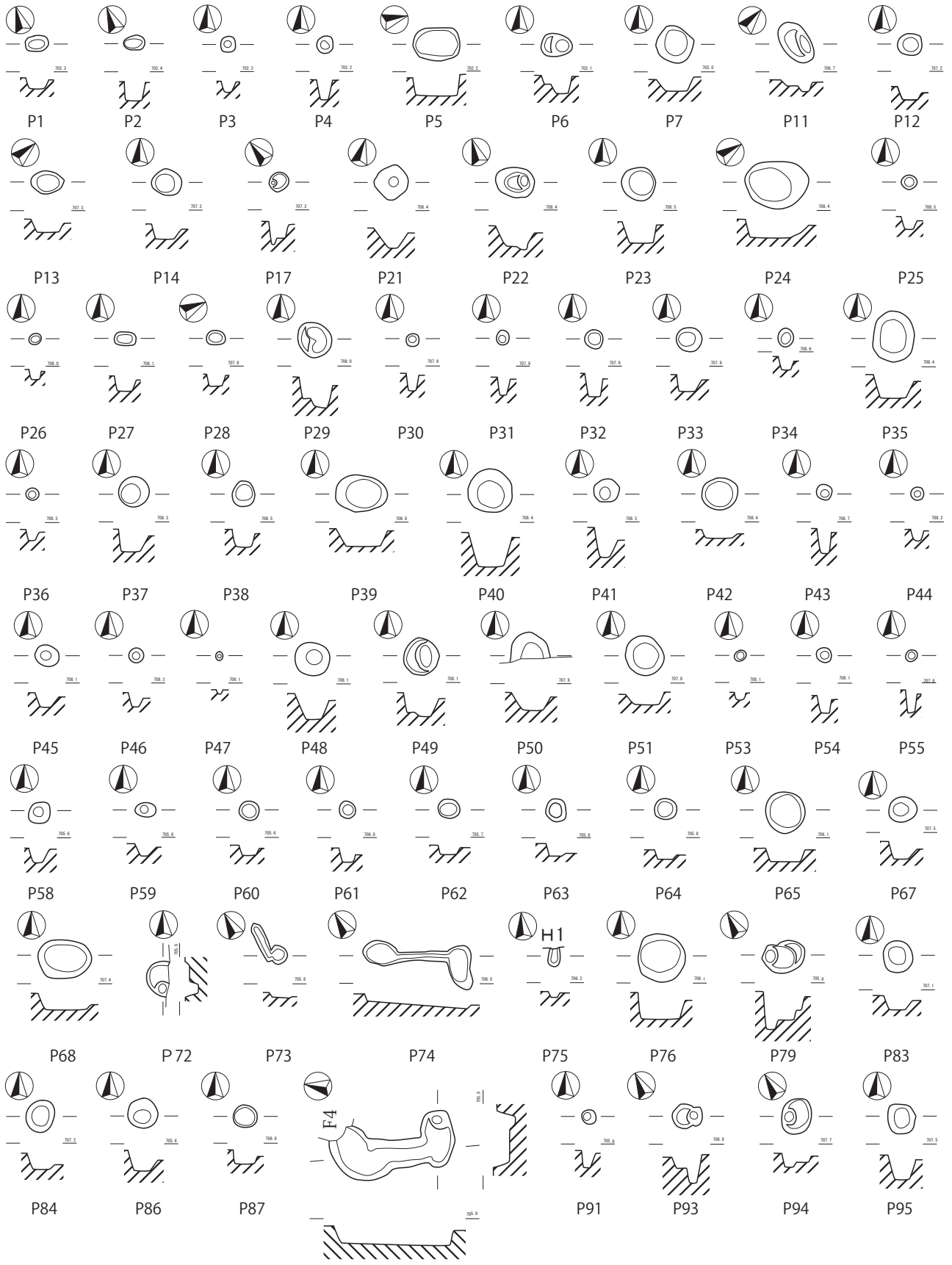


D 3号土坑

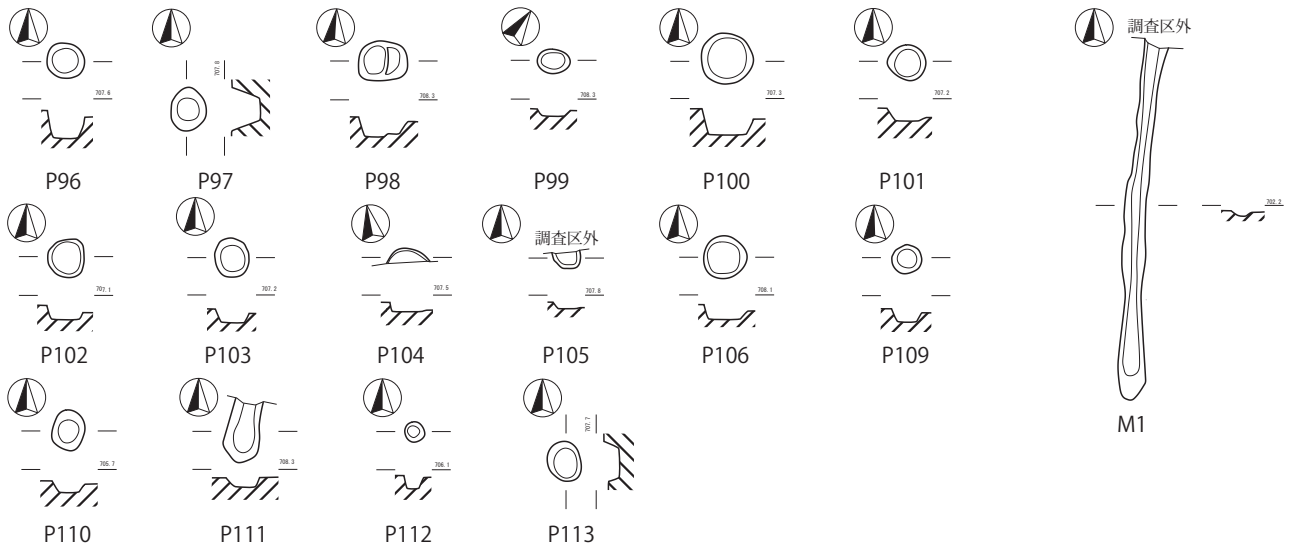
第 15 図 土坑



第 16 図 D1・3・4 号土坑、P5・66・69・70・77・78・79・81・107 ピット出土遺物



P90
第17図 ピット (1)



第18図 ピット(2)・M1号溝址

mであり、平面形状は楕円形、断面形状は逆梯形であり、比較的小型のものが大半を占めている。性格的には柱状のもの立てるための掘り込みと思われる、認識はできなかったが建物や柵を構成した遺構であろう。

遺物が出土したものは9基であり、須恵器が大半である。時期的には住居址と同時期のものであり、ピット間の重複関係が皆無であることから、同一時期の所産の可能性が高いが、中世に特徴的な小径のものも存在することから、中世のものが含まれている可能性も否定できない。

第5表 D1号土坑出土遺物観察表

No	器種	器形	法量			成形・調整		備考	出土層位
			口径	底径	器高	内面	外面		
1	土師器	碗	—	(7.0)	<2.3>	黒色処理・摩耗	摩耗・付高台	回転実測	IV区
2	須恵器	坏	—	5.0	<1.0>	ロクロナデ	右回転糸切	完全実測	III区
3	須恵器	有台坏	—	(10.8)	<1.8>	ロクロナデ	回転ヘラ切り	回転実測	IV区
4	須恵器	坏	(9.0)	—	<2.2>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	IV区
5	須恵器	坏	—	(3.0)	<1.7>	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	回転実測	III区
6	土師器	ロクロ甕	—	(6.2)	<3.2>	ロクロナデ	ヘラケズリ	回転実測	IV区
7	土師器	ロクロ甕	—	—	—	当具痕→ナデ	平行叩目	破片実測・拓本	IV区

第6表 D3号土坑出土遺物観察表

No	器種	器形	法量			備考	出土層位
			口径	底径	器高		
1	石製品	砥石	<10.9>	<8.0>	<2.7>	上下欠損、砥面数4、正面に条痕と敲打痕、両側に条痕、被熱なし	完全実測 覆土

第7表 D4号土坑出土遺物観察表

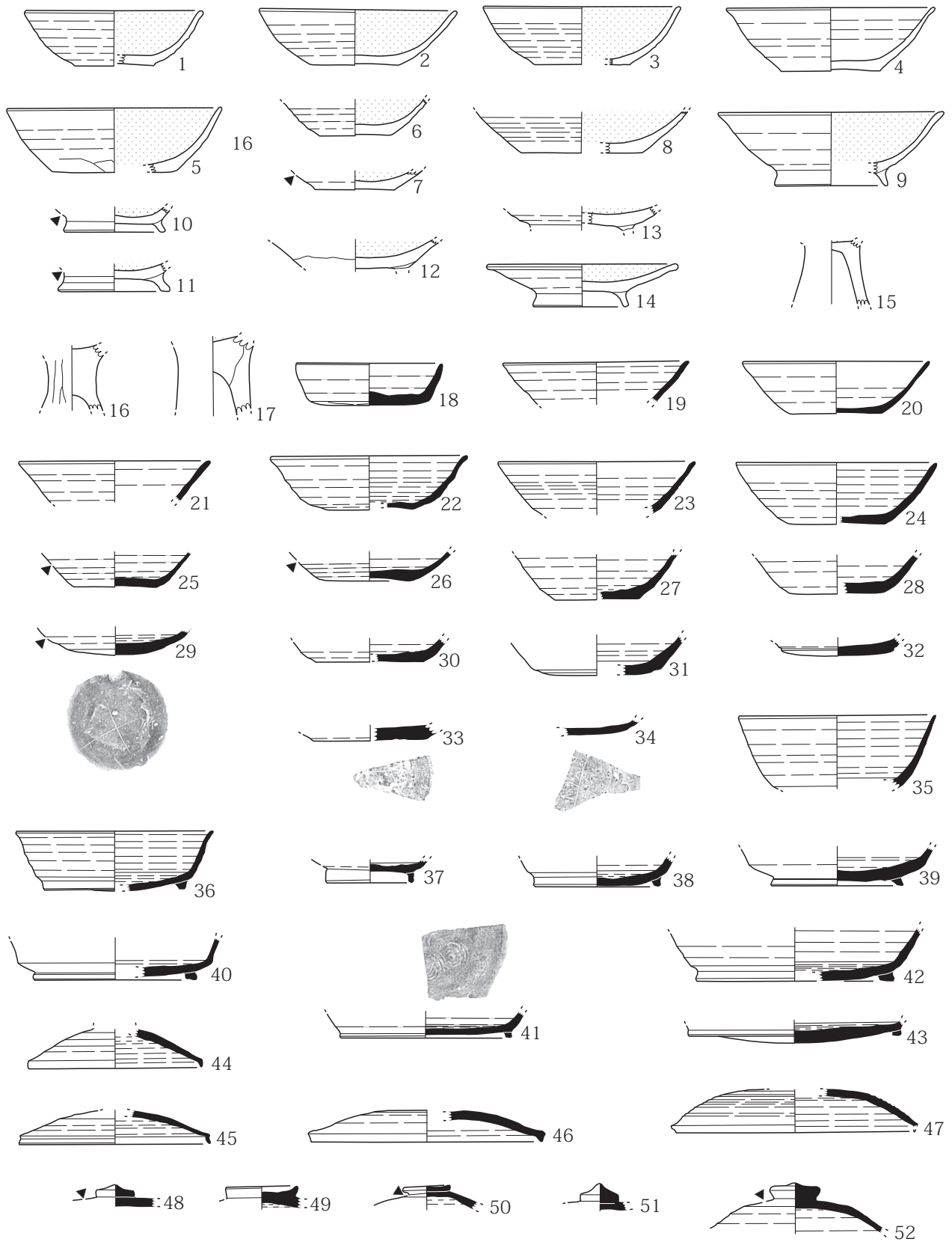
No	器種	器形	法量			成形・調整		備考	出土層位
			口径	底径	器高	内面	外面		
1	須恵器	甕	(20.4)	—	<3.8>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	覆土
2	須恵器	甕	—	(10.8)	<5.4>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	覆土
3	須恵器	甕	—	—	—	当具痕→ナデ	平行叩目	破片実測・拓本	覆土・IJ4

第8表 P5出土遺物観察表

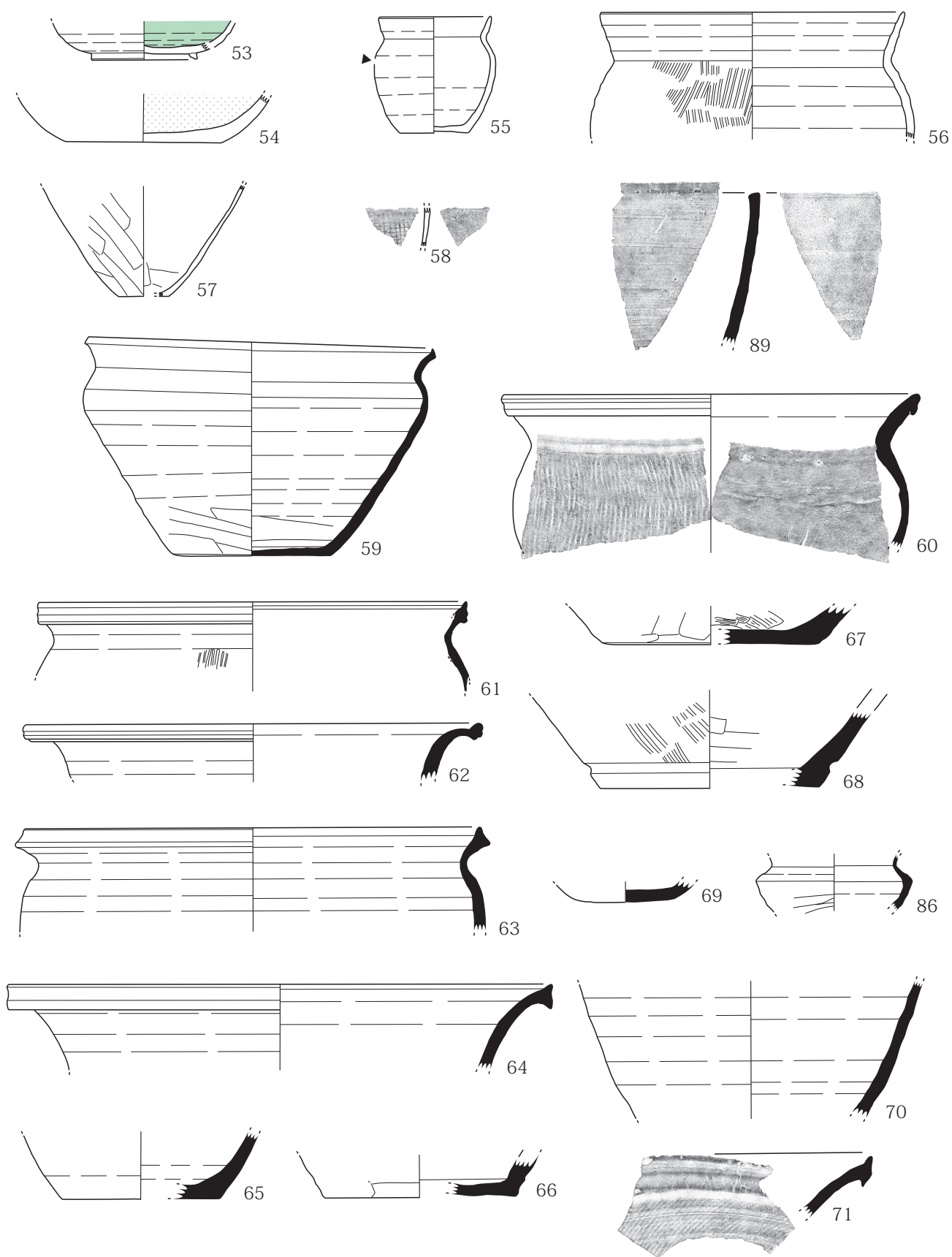
No	器種	器形	法量			重量	成形・調整		備考
			口径	底径	器高		内面	外面	
1	石器品	不明	15.5	10.4	5.0	1128.15	上端部と裏面の剥離は被熱によるものか?		完全実測

第9表 P66出土遺物観察表

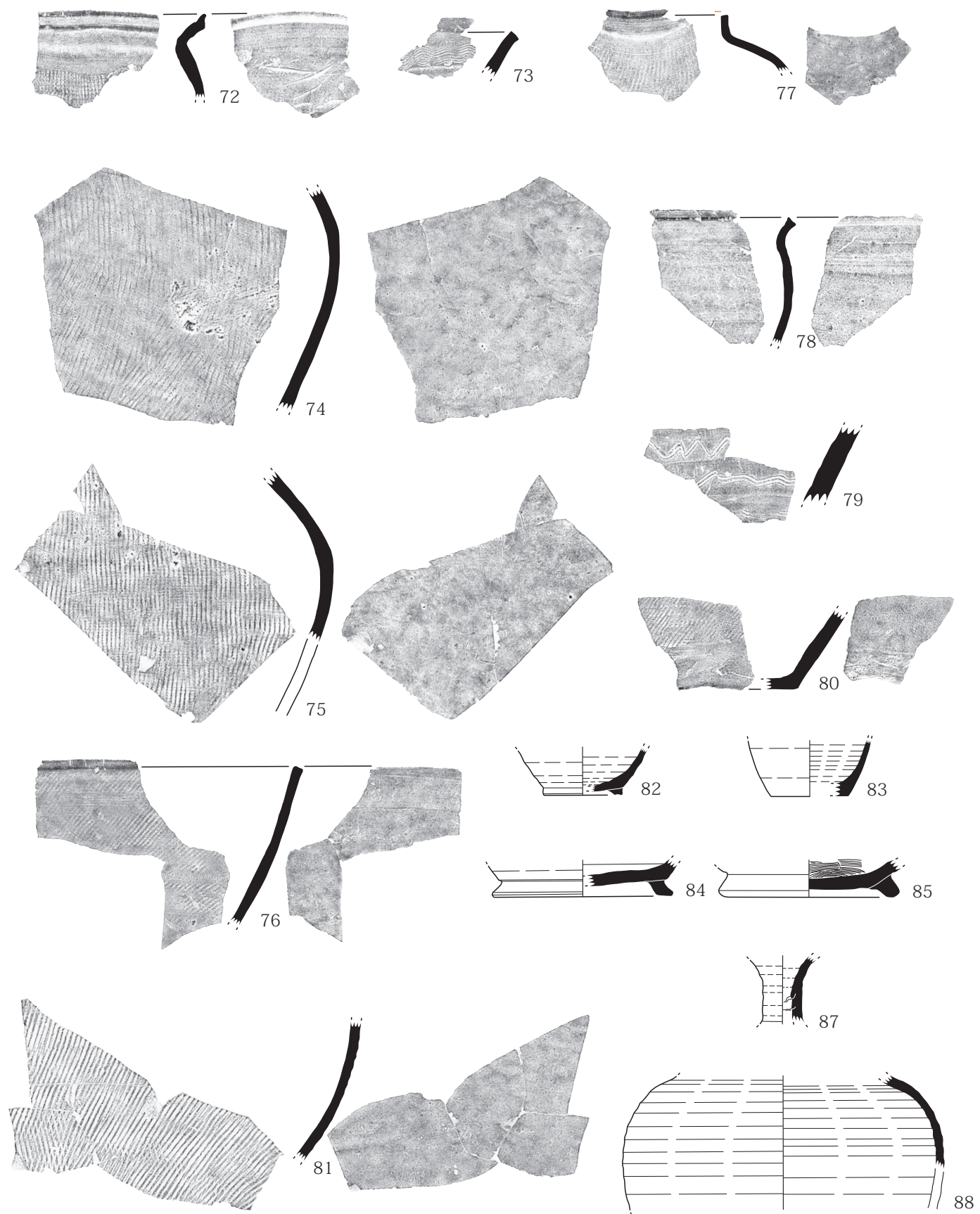
No	器種	器形	法量			成形・調整		備考
			口径	底径	器高	内面	外面	
1	土師器	高盤	—	—	<3.1>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測



第19図 遺構外出土遺物(1)



第 20 図 遺構外出土遺物 (2)



第 21 図 遺構外出土遺物 (3)

第10表 P 69 出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量			成形・調整		備考
			口 径	底 径	器 高	内 面	外 面	
1	須恵器	坏	14.2	5.6	3.7	火襷	右回転糸切	完全実測

第11表 P 70 出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量			成形・調整		備考
			口 径	底 径	器 高	内 面	外 面	
1	須恵器	有台坏	—	(9.6)	<1.9>	ロクロナデ	回転糸切→回転ヘラケズリ→付高台	回転実測
2	須恵器	甕	(19.0)	—	<3.4>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測

第12表 P 77 出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量			成形・調整		備考
			口 径	底 径	器 高	内 面	外 面	
1	須恵器	四耳壺	—	—	—	当具痕→ナデ	平行叩目・把手欠損	破片実測・拓本

第13表 P 78 出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量			成形・調整		備考
			口 径	底 径	器 高	内 面	外 面	
1	須恵器	壺	—	—	<9.3>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測

第14表 P 79 出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量			成形・調整		備考
			口 径	底 径	器 高	内 面	外 面	
1	須恵器	甕	—	—	—	ナデ	櫛描波状文	破片実測
2	須恵器	甕	(19.6)	—	<3.3>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測

第15表 P 81 出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量			成形・調整		備考
			口 径	底 径	器 高	内 面	外 面	
1	須恵器	坏蓋	(15.8)	—	<1.7>	火襷	火襷	回転実測

第16表 P 107 出土遺物観察表

No	器種	器形	法 量			成形・調整		備考
			口 径	底 径	器 高	内 面	外 面	
1	須恵器	坏蓋	(14.8)	—	<2.0>	ロクロナデ	回転ヘラケズリ・自然釉付着	回転実測

第6節 遺構外出土遺物

●土師器（第19・20図）

坏（1～8）、碗（9～13）、皿（14）、高坏（15～17）、鉢（54）、甕（55～58）の器種が認められる。坏・碗・皿のロクロからの切離しは回転糸切が大半であるが、その後回転ヘラケズリやヘラケズリ調整を加えるものも存在する。ほとんどのものの内面調整はヘラミガキ・黒色処理であるが、ナデ調整ものや、黒色処理だけのものも存在する。高坏は脚部しか出土していないため全容は不明であるが、古墳時代後期に特徴的な形態である。鉢は坏と同器形の大ぶりなもので内面はヘラミガキ・黒色処理、底部にはヘラケズリ調整が施されている。甕はロクロ甕と武蔵甕が存在し、ロクロ甕の小型のものはロクロ成形で底部に回転糸切痕をのこしているが、それ以外のものは叩き成形であり、外面に叩目が認められる。

●須恵器（第19・20・21図）

坏（18～34）、有台坏（35～43）、坏蓋（44～52）、甕（59～81）、壺（82～88）、甗（89）の器種が認められる。坏・有台坏のロクロから切離しは、ヘラと糸の両方が認められ、火襷は坏・有台坏。坏蓋に比較的多く認められる。外底にヘラ記号が刻まれるものも3点存在する。2点が「×」と判読できる。有台坏41は内面見込部に同心円の当具痕が残されている。図示しなかった坏や有台坏の破片にも何点か叩目あるいは当具痕が残されているものが見受けられることから、当遺跡の須恵器供給元の窯址に特徴的な成形技法かもしれない。有台坏の底部は高台よりも突出する形態のものも多い。坏蓋のつまみは扁平である。甕は広口・短頸の鉢型のもの、広口・長頸のものが存在する。叩き成形で作られている。壺は小型の薬壺や長頸壺・短頸壺が認められる。壺はロクロナデや回転ヘラケズリなどの調整が全面に施されている。甗は大型のもので把手が付く可能性が高い。

第17表 遺構外出土遺物観察表(1)

No	器種	器形	法量			成形・調整		備考	出土層位
			口径	底径	器高	内面	外面		
1	土師器	坏	(12.8)	(5.6)	3.9	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切	回転実測	II B5
2	土師器	坏	14.0	6.3	3.9	ヘラミガキ→黒色処理	ヘラケズリ	完全実測	II C5・6
3	土師器	坏	(14.0)	(6.8)	(4.1)	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測	II C5
4	土師器	坏	(14.8)	(7.0)	4.5	ロクロナデ	回転糸切	回転実測	II E2
5	土師器	坏	(15.2)	(8.8)	(4.6)	ヘラミガキ→黒色処理	底部・周縁ヘラケズリ	回転実測	II C5
6	土師器	坏	—	5.2	<2.6>	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切	回転実測	II B4
7	土師器	坏	—	5.6	<1.4>	ヘラミガキ→黒色処理	右回転糸切	完全実測	II C5
8	土師器	坏	—	(8.6)	<2.9>	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測	II C5
9	土師器	碗	(16.0)	(8.0)	(5.0)	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ・付高台	回転実測	II C5
10	土師器	碗	—	7.0	<1.8>	黒色処理	回転糸切→付高台	完全実測	I J4
11	土師器	碗	—	7.7	<2.0>	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切→付高台	完全実測	II B5
12	土師器	碗	—	—	<2.0>	ヘラミガキ→黒色処理	回転糸切・高台欠損	回転実測	II C5
13	土師器	碗	—	—	<1.7>	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ・高台欠損	回転実測	II D5
14	土師器	皿	13.6	6.8	3.0	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ・高台欠損	完全実測	II C6
15	土師器	高坏	—	—	<4.4>	ヘラミガキ→黒色処理	摩耗	完全実測	II A4
16	土師器	高坏	—	—	<4.6>	摩耗	ヘラケズリ	完全実測	II B5
17	土師器	高坏	—	—	<5.6>	黒色処理	摩耗	回転実測	II B5
18	須恵器	坏	(10.4)	(8.4)	3.0	ロクロナデ	ヘラケズリ	回転実測	II C3
19	須恵器	坏	(13.2)	—	<3.0>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	II E5
20	須恵器	坏	(13.3)	(6.4)	(3.7)	ロクロナデ	右回転糸切	回転実測	II E5
21	須恵器	坏	(13.6)	—	<2.9>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	II D5
22	須恵器	坏	(14.0)	(6.0)	3.8	ロクロナデ	回転糸切	回転実測	II A4
23	須恵器	坏	(14.0)	—	<3.8>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	II E5
24	須恵器	坏	(14.2)	(7.0)	(4.4)	火襷	火襷・右回転糸切	回転実測	II E5
25	須恵器	坏	—	5.9	<2.5>	ロクロナデ	右回転糸切	完全実測	II E5
26	須恵器	坏	—	6.1	<2.1>	ロクロナデ・火襷	火襷・右回転糸切	完全実測	II C5
27	須恵器	坏	—	(6.2)	<3.2>	ロクロナデ	右回転糸切	回転実測	II F5
28	須恵器	坏	—	(6.6)	<2.8>	ロクロナデ	回転糸切	回転実測	II F5
29	須恵器	坏	—	6.8	<1.5>	ロクロナデ	ヘラケズリ・ヘラ記号「×」	回転実測・拓本	II B4
30	須恵器	坏	—	(7.6)	<1.7>	火襷	火襷・底部・周縁回転ヘラケズリ	回転実測	II D2
31	須恵器	坏	—	(7.8)	<3.0>	ロクロナデ	ヘラケズリ	回転実測	II C5
32	須恵器	坏	—	(8.0)	<1.5>	ロクロナデ	ヘラケズリ	回転実測	II C5
33	須恵器	坏	—	(8.2)	<1.1>	ロクロナデ	ヘラ記号「？」	回転実測	II C5
34	須恵器	坏	—	—	—	ロクロナデ	ヘラケズリ・ヘラ記号「×」	破片実測・拓本	II B5
35	須恵器	有台坏?	(14.0)	—	<5.2>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	II C5
36	須恵器	有台坏	(19.0)	(9.8)	4.2	ロクロナデ	回転ヘラ切り→付高台	回転実測	I J3
37	須恵器	有台坏	—	6.1	1.7	ロクロナデ	回転糸切→付高台	完全実測	I G4
38	須恵器	有台坏	—	(9.0)	<2.2>	ロクロナデ・火襷	回転糸切→付高台	回転実測	II A3
39	須恵器	有台坏	—	(9.4)	<2.8>	ロクロナデ	右回転糸切→付高台	回転実測	II E5
40	須恵器	有台坏	—	(11.4)	<3.0>	ロクロナデ	回転ヘラケズリ→付高台	回転実測	II D2
41	須恵器	有台坏	—	(12.0)	<1.9>	当具痕→ロクロナデ	回転ヘラ切り→付高台	回転実測・拓本	II B4
42	須恵器	有台坏	—	(13.9)	<3.9>	ロクロナデ	回転ヘラ切り→付高台	回転実測	I J4
43	須恵器	有台坏	—	(15.0)	<1.7>	ロクロナデ	回転ヘラ切り→付高台	回転実測	I J4
44	須恵器	坏蓋	(12.3)	—	<2.9>	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	回転実測	I J3
45	須恵器	坏蓋	(12.8)	—	<2.4>	ロクロナデ	回転ヘラケズリ	回転実測	II C4・5
46	須恵器	坏蓋	(15.4)	—	<2.3>	火襷	火襷・回転ヘラケズリ	回転実測	II C5
47	須恵器	坏蓋	(16.8)	—	<2.9>	ロクロナデ	回転ヘラケズリ・火襷	回転実測	I J4
48	須恵器	坏蓋	—	—	<1.5>	ロクロナデ	ロクロナデ	完全実測	II E5
49	須恵器	坏蓋	—	—	<1.6>	ロクロナデ	つまみ貼付	完全実測	II B3
50	須恵器	坏蓋	—	—	<1.8>	ロクロナデ	回転ヘラケズリ→つまみ貼付	完全実測	I B6
51	須恵器	坏蓋	—	—	<1.9>	ロクロナデ	ロクロナデ	完全実測	II E5
52	須恵器	坏蓋	—	—	<3.6>	火襷	回転ヘラケズリ	完全実測	II E5
53	灰釉陶器	碗	—	(7.5)	<2.8>	施釉	回転ヘラケズリ→付高台	回転実測	II J5
54	土師器	鉢	—	(11.2)	<3.5>	ヘラミガキ→黒色処理	ロクロナデ	回転実測	II C5
55	土師器	ロクロナデ	(8.2)	5.0	8.4	ロクロナデ	右回転糸切	完全実測	II E5
56	土師器	ロクロナデ	(22.0)	—	<9.2>	ロクロナデ	平行叩目→ロクロナデ	回転実測	II A4
57	土師器	武蔵甕	—	(3.6)	<8.0>	ナデ	ヘラケズリ	回転実測	II EZ

●灰釉陶器（第 20 図）

内面施釉、角高台の碗が 1 点出土している。

以上の土器群の年代は、古墳時代 7 世紀～平安時代 10 世紀代であるが、多くは 8 世紀第 4 四半期～9 世紀前半代であり、遺構群の年代と同時期である。

第 18 表 遺構外出土遺物観察表 (2)

No	器種	器形	法 量			成形・調整		備考	出土層位
			口 径	底 径	器 高	内 面	外 面		
58	土師器	ロクロ甕	—	—	—	当具痕→ナデ	格子目叩目	破片実測	—
59	須恵器	甕	24.9	11.4	15.9	ロクロナデ→ヘラナデ	体下部ヘラケズリ	完全実測	II B4・II C5
60	須恵器	甕	(30.0)	—	<11.2>	当具痕→ナデ	平行叩目	回転実測	II E2
61	須恵器	甕	(31.0)	—	<6.5>	ロクロナデ	平行叩目	回転実測	II E2
62	須恵器	甕	(33.0)	—	<4.2>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	II B5
63	須恵器	甕	(33.0)	—	<7.5>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	II E5
64	須恵器	甕	(39.4)	—	<6.2>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	II E2
65	須恵器	甕	—	(11.4)	<4.9>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	II E4
66	須恵器	甕	—	(13.8)	<3.1>	ナデ	底部・周縁ヘラケズリ	回転実測	II B4
67	須恵器	甕	—	(15.8)	<2.8>	ナデ	ヘラケズリ	回転実測	II C6
68	須恵器	甕	—	(15.8)	<7.1>	ナデ	平行叩目	回転実測	I J5・II B4
69	須恵器	甕	—	—	<1.6>	ナデ	底部ヘラケズリ	回転実測	II B4
70	須恵器	甕	—	—	<10.0>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	II C6
71	須恵器	甕	—	—	—	ロクロナデ	平行叩目→ロクロナデ	破片実測・拓本	II A4
72	須恵器	甕	—	—	—	ナデ	平行叩目	破片実測・拓本	II A4
73	須恵器	甕	—	—	—	ロクロナデ	櫛描波状文	破片実測・拓本	II B3
74	須恵器	甕	—	—	—	当具痕→ナデ	平行叩目	破片実測・拓本	I J4
75	須恵器	甕	—	—	—	当具痕→ナデ	平行叩目	破片実測・拓本	I J3・4
76	須恵器	甕	—	—	—	ロクロナデ	平行叩目	破片実測	II A4・II B4
77	須恵器	甕	—	—	—	ロクロナデ	平行叩目	破片実測	II D5
78	須恵器	甕	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	破片実測	II C5
79	須恵器	甕	—	—	—	ロクロナデ	櫛描波状文	破片実測	II C5・II C6
80	須恵器	甕	—	—	—	当具痕→ナデ	平行叩目→ヘラケズリ	破片実測	II D5
81	須恵器	甕	—	—	—	当具痕→ナデ	平行叩目	破片実測	II B5
82	須恵器	壺	—	(5.8)	<3.6>	ロクロナデ	付高台	回転実測	I J6
83	須恵器	壺	—	(5.8)	<4.2>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	II C5
84	須恵器	壺	—	(13.3)	<2.9>	ヘラナデ	ヘラケズリ→付高台	回転実測	I J4・II A4
85	須恵器	壺	—	(13.6)	<2.8>	ナデ	ロクロナデ→付高台	回転実測	II C6
86	須恵器	壺	—	—	<4.3>	ロクロナデ	体部ヘラケズリ	回転実測	I J4
87	須恵器	壺	—	—	<5.2>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	II A4
88	須恵器	壺	—	—	<10.1>	ロクロナデ	ロクロナデ	回転実測	II B5
89	須恵器	甌	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	破片実測・拓本	II E4

第 19 表 遺構計測表 (1)

遺構名	重複関係	検出位置	主軸方位	長軸長	短軸長	壁残高	面積	ピット	付属施設	時期
H1		I B 7	N-3-E	3.76	—	0.4	—	16+ 掘方 6	周溝	奈・平Ⅳ期
H2	F 3・F 4を切る	II D 6	N-3-E	5.04	—	0.48	—	3	周溝	奈・平Ⅴ期
H3		II D 3	—	—	—	0.32	—	4	周溝	奈・平Ⅱ期
H4		II D 2	—	—	—	0.24	—	3	周溝	不明
遺構名	重複関係	検出位置	主軸方位	長軸長	短軸長	壁残高	面積	時期		
D 1	P 56・57に切られる	I D 7	N-103-E	—	2.8	1.36	—	奈・平Ⅴ期		
D 2		I B 8	N-81-E	—	—	0.4	—	不明		
D 3		I D 6	N-47-E	1.6	0.72	0.32	0.59	不明		
D 4		II A 4	N-40-W	—	—	0.56	—	奈・平Ⅴ・Ⅵ期		
D 5		II A 4	N-56-E	0.8	0.72	0.48	0.3	奈・平Ⅴ・Ⅵ期		
遺構名	重複関係	検出位置	主軸方位	桁行長	梁間長	面積	掘方径	掘方深度	桁行柱間	梁間柱間
F 1		I B 6	—	—	4.4	—	0.64～0.88	0.32～0.53	—	2.32～2.08
F 2		I E 5	N-10-E	5.12	—	—	0.2～0.64	0.136～0.32	0.88～2.8	—
F 3	H 2に切れ、F 4を切る	II D 5	—	—	4.08	—	0.76～1.04	0.48～0.88	1.44	2.0～2.08
F 4	H 2・F 3に切られる	II D 5	—	—	3.84	—	0.4～2.48	0.24～0.64	1.36～1.76	1.84～2.0

第 20 表 遺構計測表 (2)

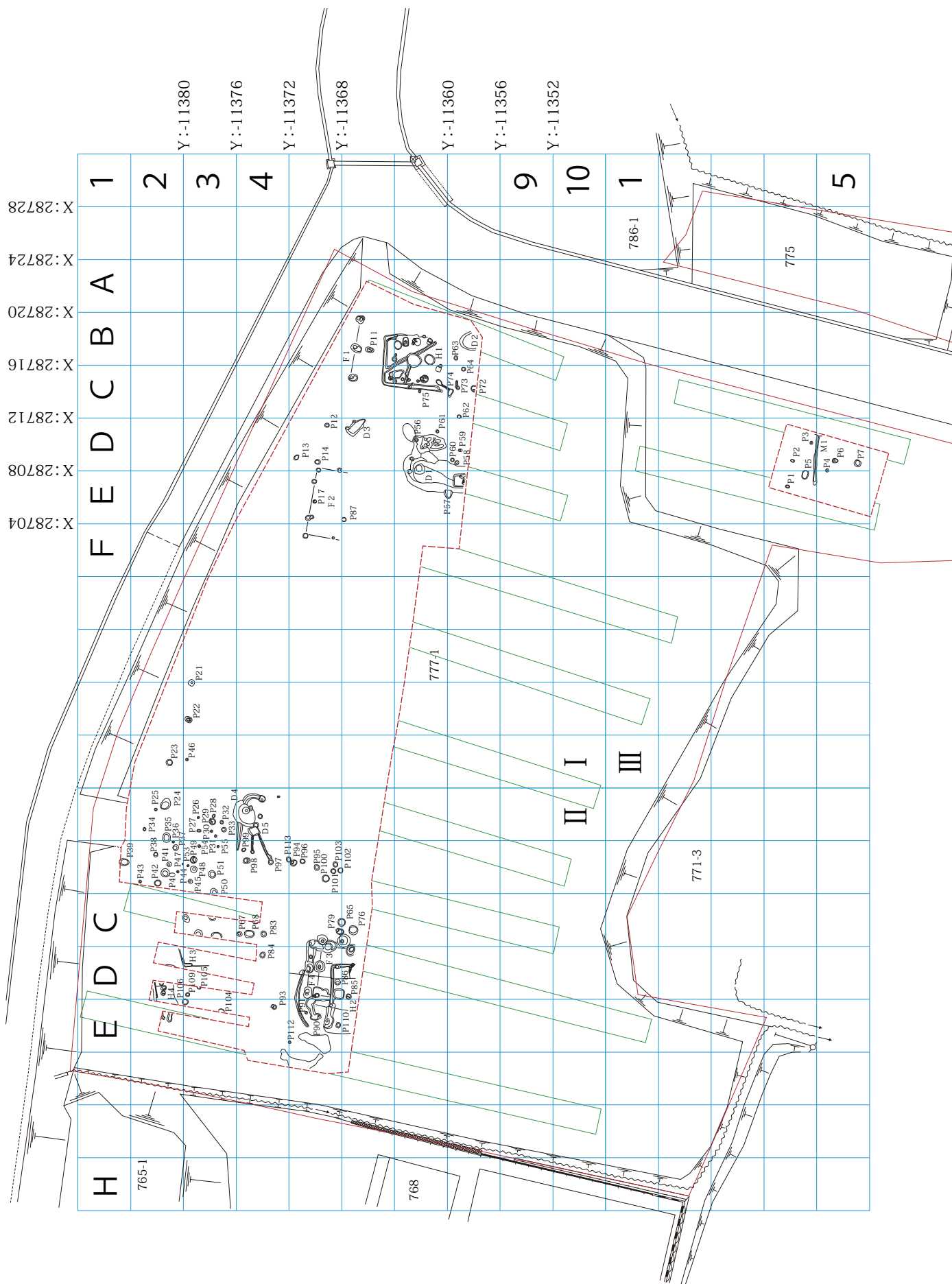
遺構名	重複関係	検出位置	長径	短径	深度	形態	覆 土
P 1		Ⅲ E 4	0.34	0.23	0.15	楕円形	灰黄褐色土層 (10YR4/2)。10YR6/6 少含
P 2		Ⅲ D 4	0.31	0.22	0.29	楕円形	灰黄褐色土層 (10YR4/2)。10YR6/6 少含
P 3		Ⅲ D 4	0.22	0.22	0.16	方形	灰黄褐色土層 (10YR4/2)。10YR6/6 少含
P 4		Ⅲ E 5	0.23	0.2	0.3	楕円形	灰黄褐色土層 (10YR4/2)。10YR6/6 少含
P 5		Ⅲ E 4	0.68	0.47	0.3	楕円形	灰黄褐色土層 (10YR4/2)。10YR6/6 少含
P 6		Ⅲ D 5	0.46	0.33	0.26	楕円形	灰黄褐色土層 (10YR4/2)。10YR6/6 少含
P 7		Ⅲ D 5	0.45	0.43	0.2	方形	灰黄褐色土層 (10YR4/2)。10YR6/6 少含
P 11		I B 6	0.54	0.31	0.15	楕円形	灰黄褐色土層 (10YR4/2)。10YR3/2・6/ 3 少含
P 12		I D 5	0.36	0.31	0.2	楕円形	にぶい黄褐色土層 (10YR6/4)。10YR7/3 少含
P 13		I D 5	0.48	0.34	0.2	楕円形	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR7/3 含
P 14		I D 5	0.44	0.38	0.21	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/2)。10YR4/4・6/4 少含
P 17		I E 5	0.28	0.2	0.33	楕円形	黒褐色土層 (10YR2/2)。10YR4/4・6/4 少含
P 21		I I 3	0.34	0.32	0.25	楕円形	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR4/3 含
P 22		I I 3	0.55	0.43	0.29	楕円形	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR7/4 含
P 23		I J 2	0.49	0.48	0.29	円形	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR6/4・7/3 含
P 24		Ⅱ A 2	0.92	0.68	0.26	楕円形	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR6/4・7/3 含
P 25		Ⅱ A 2	0.22	0.2	0.19	円形	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR7/4 含
P 26		Ⅱ A 3	0.16	0.13	0.15	楕円形	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR7/4 含
P 27		Ⅱ A 3	0.31	0.19	0.23	楕円形	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR7/4 含
P 28		Ⅱ A 3	0.28	0.2	0.18	楕円形	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR7/4 含
P 29		Ⅱ A 3	0.41	0.39	0.36	楕円形	1 にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR6/6 含 2 明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR7/4 含
P 30		Ⅱ A 3	0.19	0.19	0.25	方形	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR7/4 含
P 31		Ⅱ A 3	0.21	0.18	0.26	楕円形	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR7/4 含
P 32		Ⅱ A 3	0.27	0.25	0.31	楕円形	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR6/6 少含
P 33		Ⅱ A 3	0.36	0.35	0.24	円形	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR6/6 少含
P 34		Ⅱ A 2	0.27	0.23	0.2	楕円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR7/4 少含
P 35		Ⅱ A 2	0.73	0.59	0.34	楕円形	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR7/4・6/6 少含
P 36		Ⅱ B 2	0.19	0.18	0.16	円形	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR4/3 含
P 37		Ⅱ B 2	0.44	0.44	0.34	円形	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR6/6 少含
P 38		Ⅱ B 2	0.37	0.32	0.26	楕円形	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR6/6 少含
P 39		Ⅱ B 1	0.74	0.53	0.26	楕円形	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR6/6 少含
P 40		Ⅱ B 2	0.63	0.62	0.48	円形	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR6/6 少含
P 41		Ⅱ B 2	0.37	0.33	0.43	楕円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR7/4 少含
P 42		Ⅱ B 2	0.51	0.44	0.12	楕円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR7/4 少含
P 43		Ⅱ B 2	0.2	0.2	0.35	円形	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR7/4 含
P 44		Ⅱ B 2	0.19	0.19	0.16	円形	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR7/4 含
P 45		Ⅱ B 2	0.32	0.28	0.22	楕円形	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR3/2 含
P 46		I J 3	0.22	0.21	0.17	円形	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR3/2 含
P 47		Ⅱ B 2	0.13	0.11	0.07	楕円形	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR3/2 含
P 48		Ⅱ B 3	0.39	0.35	0.34	楕円形	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR6/6 少含
P 49		Ⅱ B 3	0.54	0.51	0.29	楕円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 50		Ⅱ B 3	—	—	0.26	—	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 51		Ⅱ B 3	0.49	0.4	0.19	楕円形	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR6/6 少含
P 53		Ⅱ B 3	0.15	0.12	0.12	楕円形	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR4/3 含
P 54		Ⅱ B 3	0.18	0.17	0.26	円形	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR6/6 少含
P 55		Ⅱ B 3	0.13	0.13	0.33	円形	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR7/4 含
P 58		Ⅱ D 8	0.27	0.25	0.22	楕円形	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR7/4 少含
P 59		Ⅱ D 8	0.3	0.21	0.18	楕円形	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR7/4・3 少含
P 60		I D 8	0.29	0.27	0.15	円形	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR6/6 少含
P 61		I D 7	0.22	0.19	0.22	楕円形	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR6/6 少含
P 62		I C 8	0.32	0.27	0.13	楕円形	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR6/6 少含
P 63		I B 8	0.33	0.31	0.18	楕円形	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR6/6 少含
P 64		I C 8	0.34	0.3	0.15	楕円形	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR6/6 少含
P 65		Ⅱ C 5	0.6	0.58	0.2	楕円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 67		Ⅱ C 4	0.41	0.35	0.27	楕円形	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR7/4・3/2 含
P 68		Ⅱ C 4	0.77	0.55	0.24	楕円形	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR7/4・3/2 含
P 72		Ⅱ C 8	—	0.5	0.2	—	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR7/4 少含

第21 遺構計測表 (3)

遺構名	重複関係	検出位置	長径	短径	深度	形態	覆 土
P 73		I C 8	0.58	0.26	0.06	—	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR7/4 少含
P 74	H 1 に切られる	I C 8	1.55	0.34 ~ 0.63	0.12	—	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR7/4 少含
P 75	H 1 に切られる	I C 7		0.18	0.08	—	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR7/4 少含
P 76		II C 6	0.69	0.68	0.38	円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 79		II C 5	0.61	0.43	0.54	—	1 黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6・炭化物少含 2 明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR3/2 少含 柱痕 10YR3/2
P 83		II C 4	0.46	0.41	0.21	楕円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 84		II D 4	0.44	0.38	0.23	楕円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 86	H 2 に切られる	II D 5	0.44	0.43	0.31	円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 87		I E 6	0.35	0.32	0.19	楕円形	明黄褐色土層 (10YR6/6)。10YR7/4 多含
P 90	F 3・F 4 に切られる	II E 5	1.8	0.8	0.28	—	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 91		II E 5	0.18	0.17	0.25	—	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 93		II E 4	0.43	0.35	0.41	—	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 94		II B 5	0.47	0.42	0.2	楕円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 95		II B 5	0.37	0.33	0.32	方形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 96		II B 5	0.38	0.36	0.3	円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 97		II B 4	0.46	0.37	0.31	楕円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 98		II B 4	0.52	0.42	0.21	楕円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 99		II B 4	0.35	0.26	0.08	楕円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 100		II B 5	0.55	0.53	0.28	円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 101		II B 5	0.41	0.38	0.14	円形	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR6/6 少含
P 102		II B 5	0.33	0.3	0.15	円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 103		II B 5	0.39	0.34	0.14	楕円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 104		II E 3		—	0.1	—	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 105		II D 3		0.29	0.08	—	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 106		II E 3	0.46	0.43	0.16	—	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 109		II D 3	0.28	0.26	0.15	円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 110	H 2 に切られる	II E 5	0.43	0.35	0.13	楕円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 111		II E 2		0.38	0.1	—	にぶい黄褐色土層 (10YR4/3)。10YR7/3 少含
P 112		II E 5	0.2	0.2	0.13	円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含
P 113		II B 4	0.36	0.31	0.14	楕円形	黒褐色土層 (10YR3/2)。10YR6/6 少含

第三章 まとめ

今回調査を行った箇所は、薬師平遺跡の西側山裾斜面部分であった。この山裾を上り詰めると望月城跡の郭に行き着くのであり、今回の調査範囲の一部は望月城域の末端部分でもあるわけである。遺跡の主體的な時期は奈良時代後半（8世紀第4四半期）から平安時代前葉（9世紀代）で、遺物の出土量は多めであった。住居址の残存状態は極めて悪く、特に斜面に築かれたH3・4号住居址は僅かに痕跡が認められたに過ぎない。斜面下方には比較的広い平坦面が布施川に向かい広がっており、地表面には多くの土器片が散布しており、薬師平遺跡の中核部分が展開しているであろうことは想像に難くない。出土遺物には特別なものはなく、文字資料も皆無で、金属器も非常に少ない。昭和56・57年にR142号バイパス工事に伴い調査された近隣の瓜生坂A・宮久保A・布施山寺A・岩井遺跡なども同様の内容であった。布施谷の入口部分の山裾斜面に形成されたこれら一連の集落は、古くから継続的に営まれた集落ではなく、奈良時代後半に突如として出現している。その背景には政治的要因を考える必要もある。また、近くを古道が通っており、これとの関係にも注意が必要である。さて、これら集落の人々の生活を支えた生業であるが、布施川が形成した狭小な沖積地では十分な水田は確保出来ない。生業の主体は稲作以外であったろう。使い古された回答であることは十分承知の上で、「馬」と「須恵器」の2点が現在のところもっとも妥当であるように思えるが、麻などの栽培も考えていく必要があるのかもしれない。



第 22 図 薬師平遺跡全体図



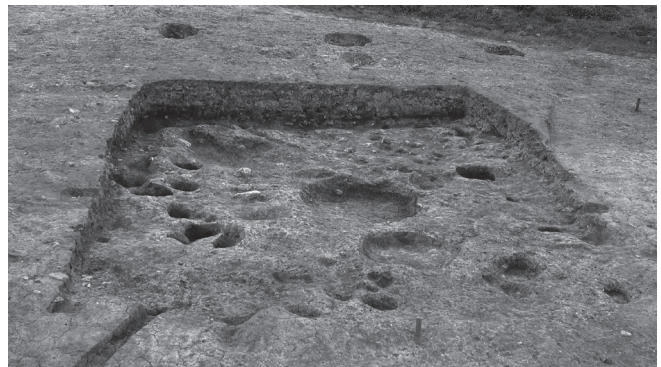
H 1 号住居址完掘



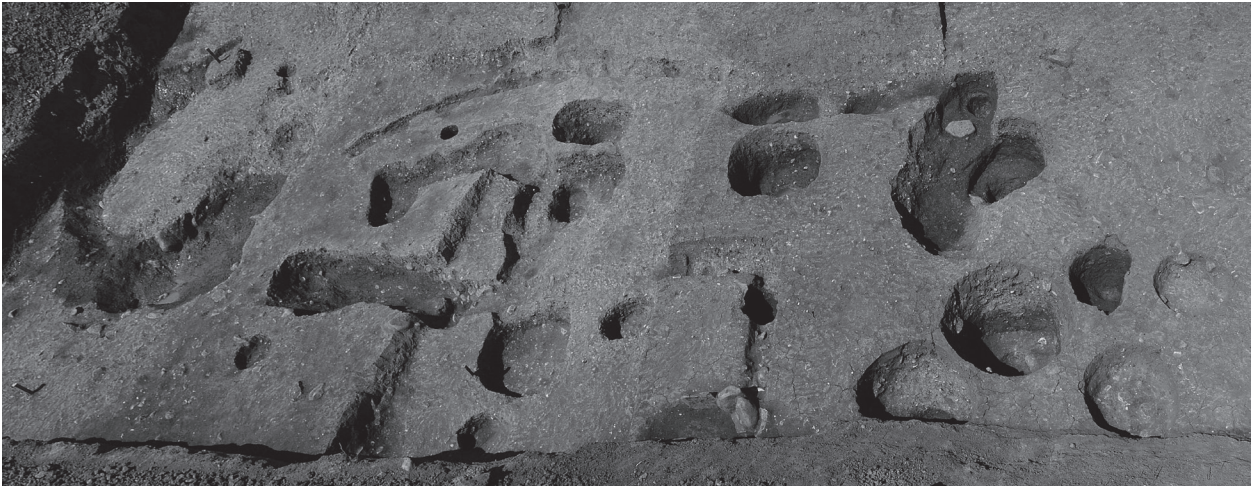
H 1 号住居址カマド



H 1 号住居址カマド



H 1 号住居址掘方



H 2 号住居址完掘



H 2 号住居址カマド

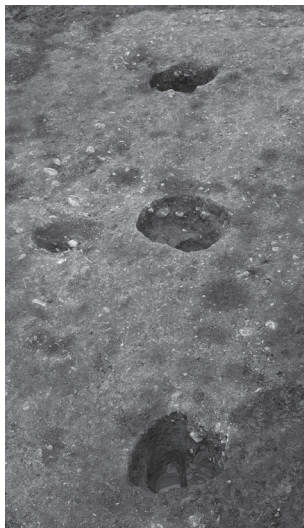


H 3 号住居址完掘



H 4 号住居址遺物出土状況

图版 4



F 1 号掘立柱建物址完掘



F 2 号掘立柱建物址完掘



F 3 · 4 号掘立柱建物址完掘



D 2 号土坑完掘



D 3 号土坑完掘



D 1 号土坑完掘



D 4 · 5 号土坑完掘



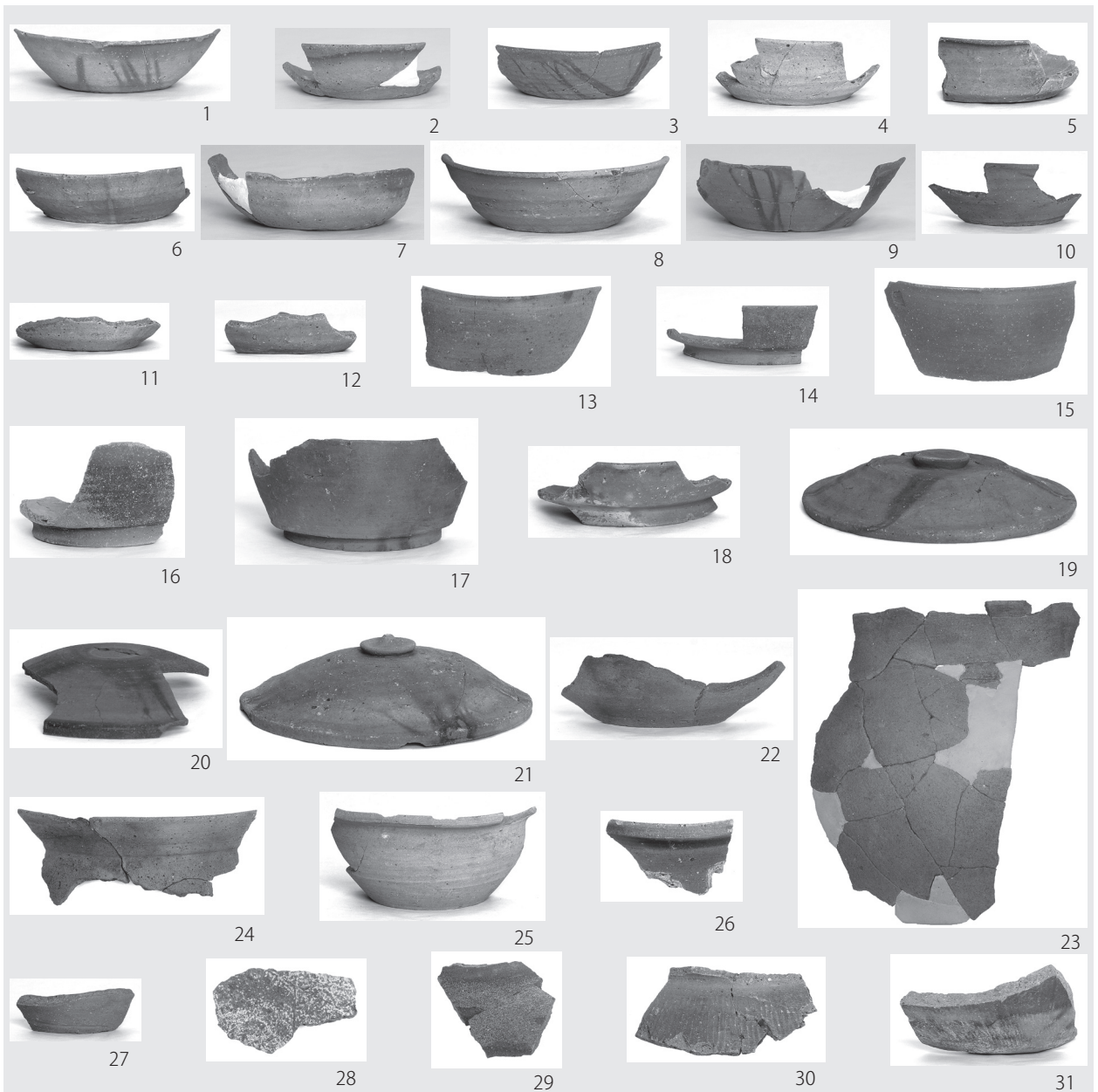
D 5号土坑完掘



遺跡遠景（布施川対岸より）

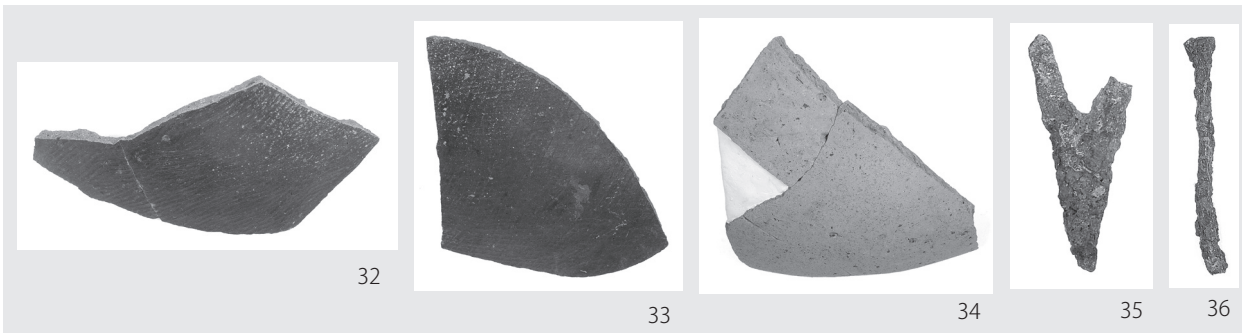


遺跡近景（西から）

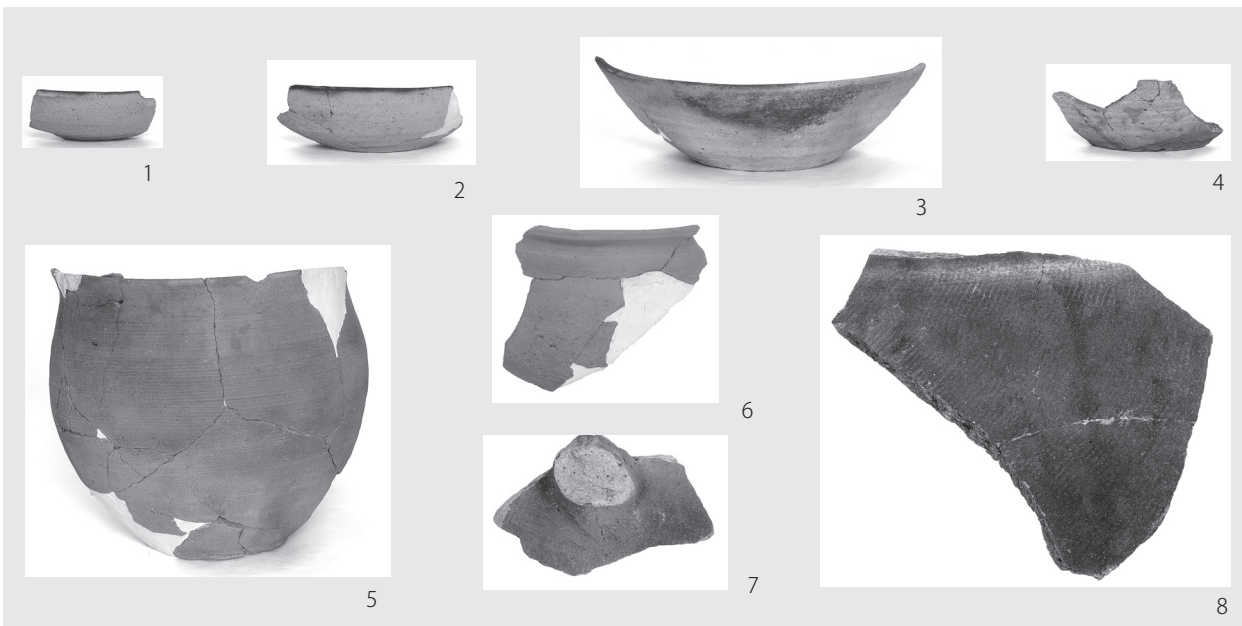


H 1 号住居址出土遺物 (1)

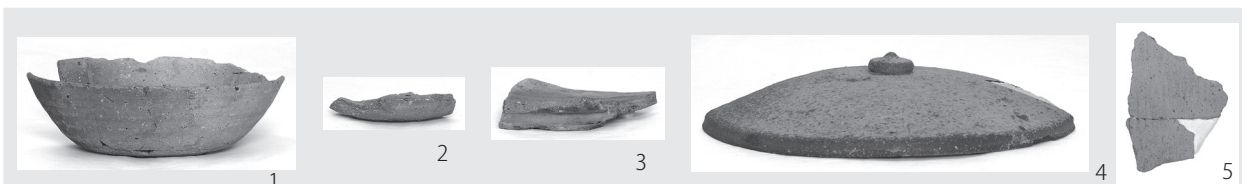
图版 8



H 1 号住居址出土遺物 (2)



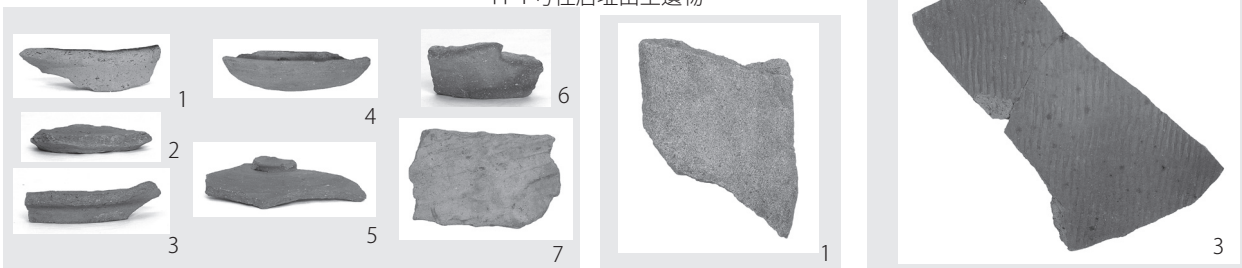
H 2 号住居址出土遺物



H 3 号住居址出土遺物



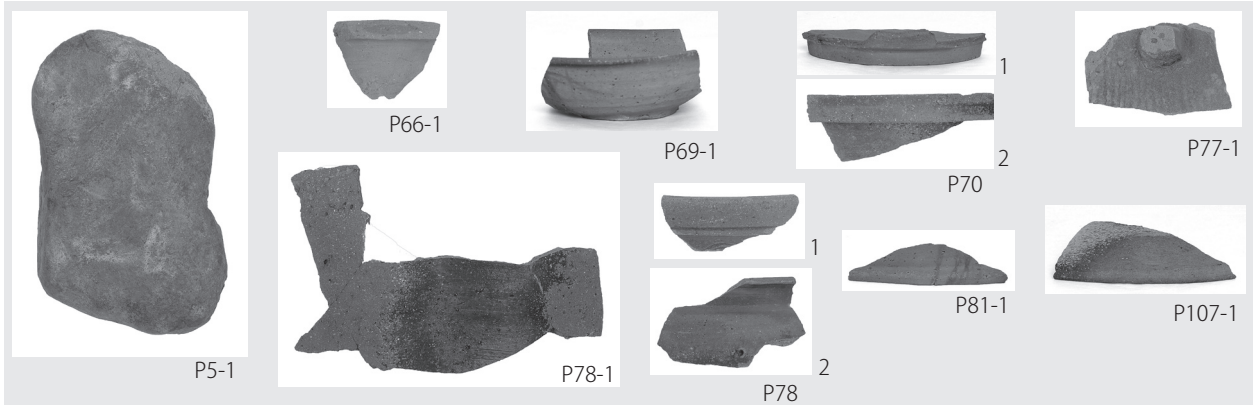
H 4 号住居址出土遺物



D 1 号土坑出土遺物

D 3 号土坑出土遺物

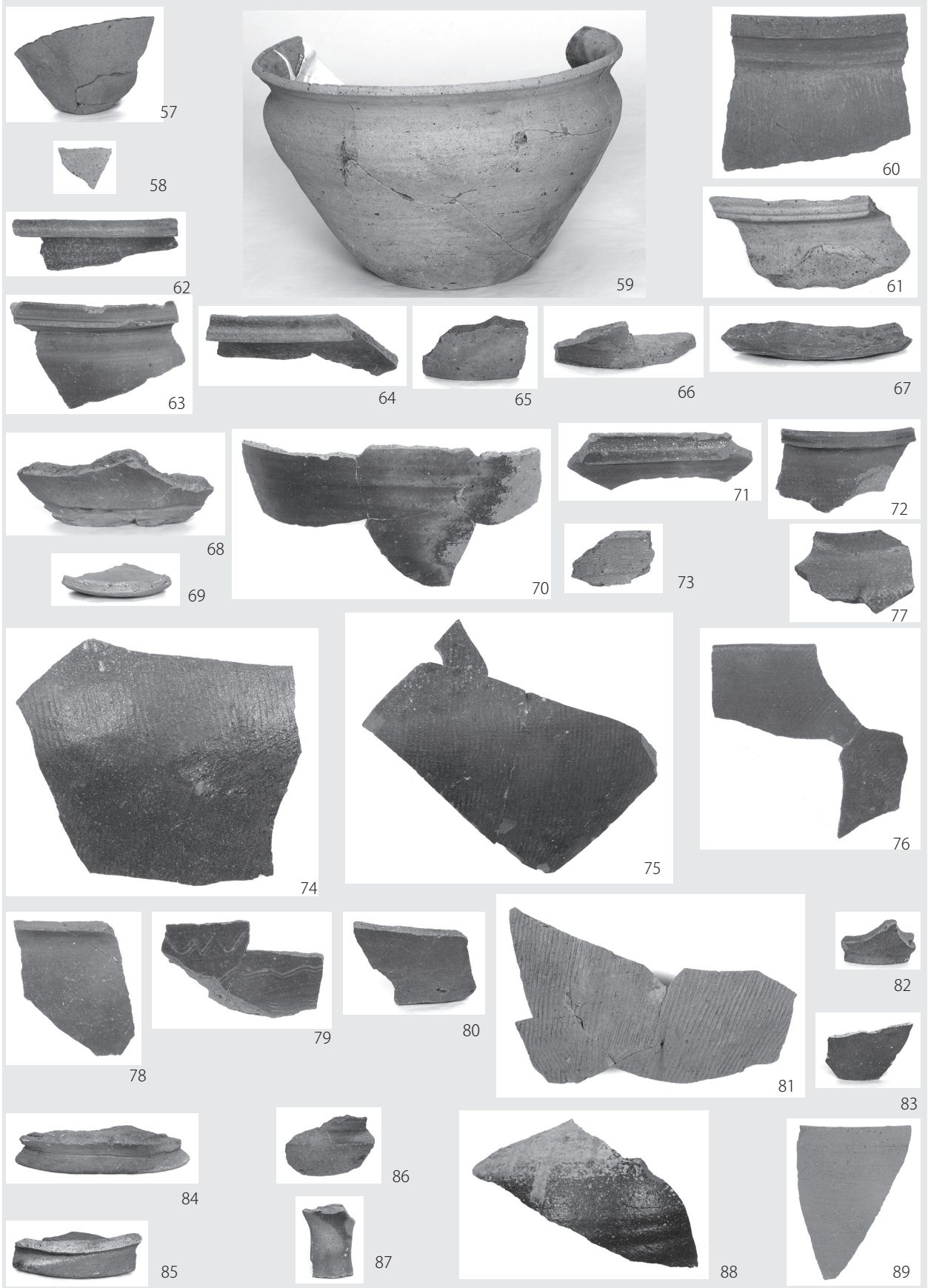
D 4 号土坑出土遺物



ピット出土遺物



遺構外出土遺物 (1)



遺構外出土遺物 (2)

報 告 書 抄 録

ふりがな	やくしだいらいせき
書名	薬師平遺跡
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書 第236集
編集者名	小林真寿
編集機関	佐久市教育委員会
発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	20160331
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市志賀 5953
ふりがな	やくしだいらいせき
遺跡名	薬師平遺跡
ふりがな	ながのけんさくしふせ
遺跡所在地	長野県佐久市布施 775-1 他
遺跡番号	1072
北緯	36.15.31
東経	138.22.24
調査期間	20140406 - 20140507
調査原因	福祉施設建設
調査面積	1,000㎡
種別	集落遺跡
主な時代	奈良・平安時代
遺跡概要	遺構－竪穴住居址 4 (奈良・平安)、掘立柱建物址 4 (不明)、土坑 5 (平安・不明) 溝 1 (不明)、ピット 87 (奈良・平安・不明) 遺物－土師器 (古墳時代後期・奈良・平安)、須恵器 (古墳時代後期・奈良・平安)、灰釉陶器 (平安)
特記事項	曲物の出土。

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第236集

薬師平遺跡

平成 28 (2016) 年 3 月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒 385-8501 長野県佐久市中込 3056

社会教育部 文化振興課文化財事務所

〒 385-0006 長野県佐久市志賀 5953

TEL 0267-68-7321

印刷所
